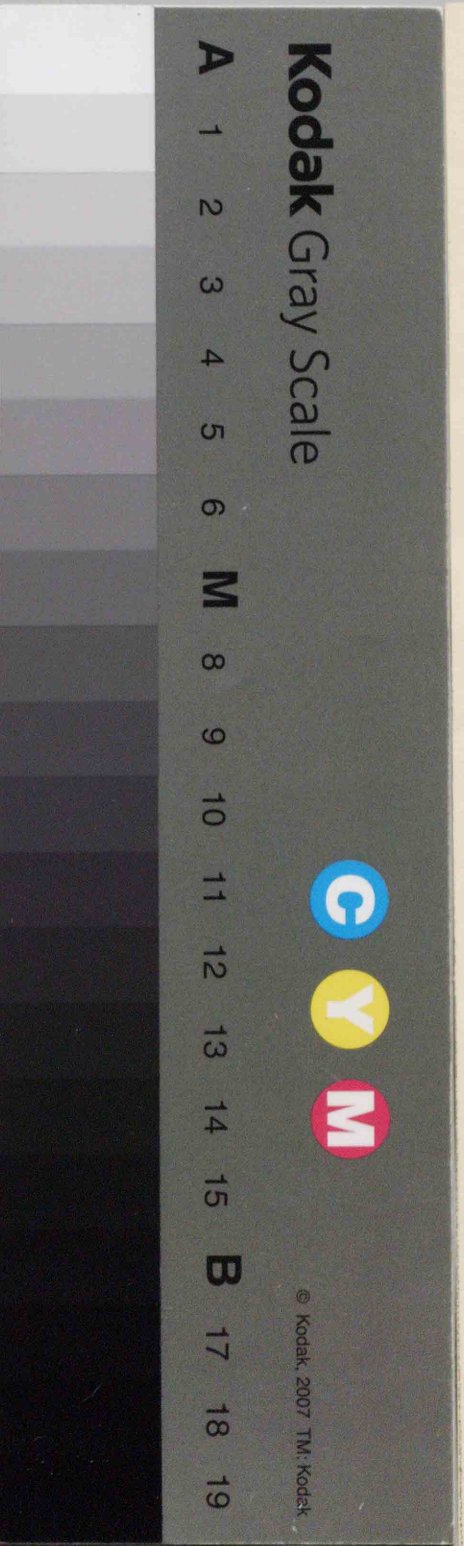
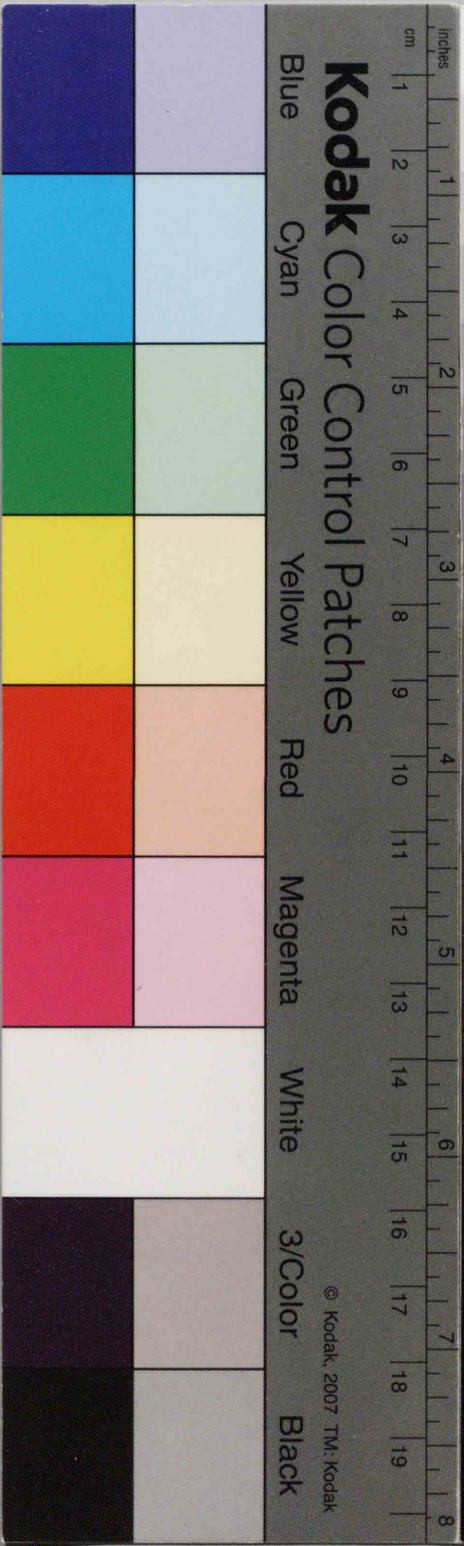
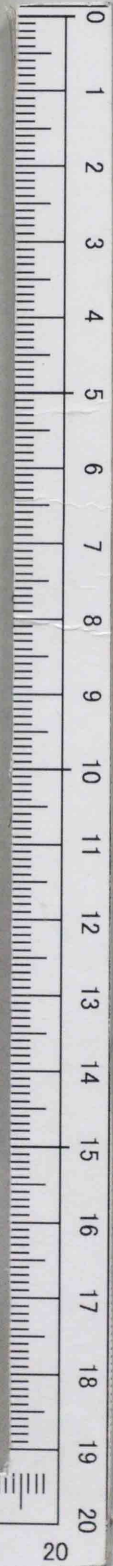


訂三
帝國讀本
卷六

4a
810
大12

教科
41
200



41592

教科書文庫

4
810
41-1923
20000 73193

71
153



資料室

42
810
大12

大正二十一年十一月十四日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

大正十三年版

三訂帝國讀本

東京

資會社 富山房發行

広島大学図書

2000073193



教科書文庫

4

810

41-1923

2000073193



三訂帝國讀本 卷六 目次

一	日本民族論 其の一	一
二	日本民族論 其の二	八
三	平安京	一五
四	大嘗祭	二〇
五	テニスの試合	二六
六	秋冬の句	三三
七	武藏野日記	三九
八	伊藤公を誅ぶ	四〇
九	人臣の道	四三

目次

一〇	天の逆鋒	四
一一	雨の興	五
一二	雪前雪後	五
一三	四季の和歌 其の一	六
一四	四季の和歌 其の二	六
一五	獨創力	六
一六	箱王仇に遇ふ	七
一七	舟ふな	八
一八	鎮西八郎 其の一	八
一九	鎮西八郎 其の二	九
二〇	白河殿夜討	九
二一	東大寺	一〇

三三	十訓抄	一〇八
三三	文學と氣品	一一三
二四	平重盛論	一一九
二五	土の句	一二七
二六	春の樂み 其の一	一三四
二七	春の樂み 其の二	一三八
二八	日本人と自然美	一四一
自修文		
一	文字	一
二	新聞社の組織	四
三	碓氷だより	一〇

四 植物と氣象との關係……………一四

五 如意輪堂……………二〇

六 膽力の養成……………三三

七 箱根山……………六六

卷六目次終

三訂帝國讀本卷六

一 日本民族論 其の一

白鳥庫吉

黄色人と白哲人の競争は、決して近年になつて始つたものではない、亞細亞の舊い歴史を見ると、天山^(一)葱嶺^(二)を境として、有史以前の遼焉^(三)たる時代に始り、近代に及んで居るのである。其の大體の形勢をいふと、西洋史の近代に至るまでは、黄色人種の勢がなか／＼盛であつて、次第に亞細亞に於ける白哲人を壓倒して、或は之を西方に驅逐したり、或は之を其の地に於て支配したりして、非常な威力を振つた。昔に亞

白哲人
 (一)支那新疆と露領トルキスタンの間にある一大山脈
 (二)天山山脈の一節
 (三)遼焉
 有史以前

Balkan. 歐洲の東南部。アドリア海と黒海との間の大半島。

立脚地

細亞に於ける白哲人に對して威力を振つたのみでなく、進んで現今の歐羅巴に居る白哲人をも侵撃し、露西亞を支配したり、又現今の匈牙利などに據つて、歐羅巴の西は佛蘭西、南は伊太利までも侵入して居る。そして其の結果の今日まで傳はつて居るのは、歐洲の中央に於ける匈牙利人、巴爾幹半島に於ける土耳其人等である。現今の匈牙利人は、もとは烏拉爾山脉の南方に居つたもの、土耳其人はもとは天山の近傍に居つたものであるが、それが次第に西方へ突進して、かく歐洲の天地に立脚地を有するに至つたのを見て、如何に黄色人が一時其の勢力を振つたかを證明するに餘りあるであらう。

然るに近世の初からして形勢は一轉して、黄色人の勢力

掣肘

は次第に衰へ始め、白哲人の方が非常に盛になつて、次第に黄色人を壓倒するといふ傾向になつて來たのである。今日亞細亞大陸に於ける南北の黄色人は、何れも歐洲の強國に或は支配されたり、或は掣肘されたりして、完全な獨立をなして居るものはない。世界大戰の起因であつた巴爾幹半島の問題は、歴史上如何なる事を意味するかといふに、白哲人が次第に勢力を得て、歐羅巴に居る黄色人を歐羅巴から驅逐せんとする歴史上の自然の結果に外ならない。歐米の白哲人は、東洋人といへば一概に輕蔑して、何事に於ても自分等より劣等の者で、到底自分等と肩を並べることの出來ぬ人間と信ずるやうになつてしまつた。そこで我が國に對しても日本人もやはり黄色人であるから、此等は怖るべき

駁々乎

裏切る

黃禍説

目す

ものでないと從來は考へて居つた。然るに此の日本人が前には日清戦争、後には日露戦争によつて非常な武力を顯し、そして歐洲の文明を或程度まで採用し利用して、駁々乎として發展進歩して行く手並は、彼等の豫想を全く裏切つたのであつた。其の反動として、今度は之を怖るゝことも、妬むことも、亦實際に過ぎてしまつた。そこで先年から歐洲に唱へられた黃禍説などいふものも行はれるやうになつた。夫等の人は日本人を目して、之は嘗て中歐匈牙利まで侵入した蒙古人の如く、戦を好む國民であると速斷し、そして之を怖れ憎むことになつた。そこで動もすれば、日本人は蒙古人であるといふやうな理由を以て、政治上當然受くべき權利をも妨害さるゝやうな傾向になつて來た。然るに日本人は

不見識

火を睹るより明らか

曲辯

(Mongoloid)

其のことを聞いて驚いて、成るべく日本人を蒙古人でないやうにしようと考へ、日本人は歐羅巴人に類した人種だとか、日本人は亞細亞人ではないといふやうなコジツケ説を吐くやうな傾がある。併しながら之は實際を顧ない不見識な議論である。我々日本人は黄色人であつて、白哲人でないことは、火を睹るよりも明らかなる事實である。何を苦しんで亞細亞人に非ず、黄色人に非ずなどと曲辯するか。實に不見識千萬な話である。

我々日本人は謂はゆる黄色人で、今日の人種學者、言語學者の謂ふモンゴロイドの一種なることは、最早争ふべからざる事實である。けれども此の學術上のモンゴロイドといふ言葉は、單に黄色い顔色をして居る人種を假に名づけた

もので、我々日本人がモンゴロイドであるといふ其のモンゴロイドは、古へ勇武を以て鳴つた成吉思汗の蒙古人といふのは、其の意味を異にするのである。我々日本人は、黄色い顔をして居る人種を總稱したモンゴロイドの中には屬するけれども、成吉思汗を出した蒙古人とは同一でないのである。學術上の廣い意味の蒙古人と、成吉思汗の蒙古人とを混同する所から歐米人は無暗に之を怖れたり、又日本人は不見識にも之を辯解したりするのである。

日本人はモンゴロイドではあるが、成吉思汗の蒙古人ではないというたが、然らば日本人は實際如何なる人種であるか、之は大いに研究して見なくてはならぬ問題である。

一體此の日本の人種については、其の本源が分らない。南

(Anam. 印度支那東部の王國。佛國の保護を受く。)
(Siam. 亞細亞東南部の王國。)
論斷

方に旅行した日本人は、安南(一)であるとか、暹羅(二)であるとか、亞細亞の南方の黄色人に、容貌上、生活上類似することを認め、日本人は南方より來れりと直ちに論斷するものがあり、それと同時に、朝鮮半島より滿洲蒙古等に旅行するものは、又其等の土地の人間が日本人に類似して居る所から、我々は北方の民族と同一なりとの説を立てる。成程俗人が只漫然と見た所では、両方の人民に類似して居るので、各其の説を異にするのであるが、結局何れとも斷定は出來ぬ。併し南北両方の人種の何れにも似て居るといふのは實際であつて、予の見る所によれば、我が日本人種は、亞細亞の南北の兩人種の間位に位するもので、兩人種の間民族であると思ふ。それ故に北に旅行するものは北方民族といひ、南に旅行す

るものは南方民族といふのである。

二 日本民族論 其の二

一體亞細亞の南北の黄色人種は、如何なる性質を有するかといふに、まづ亞細亞の北方に據つて居る民族、即ち今日の言語學者や人種學者のウラルアルタイ民族と稱ふるものを見るに、此の民族は、中には歴史上の舞臺に顔を出さないものもあるが、大概是歴史上に活動した。而も其の中最も有名なのは土耳其人、蒙古人、ツングース、マジール^(一)即ち匈牙利人等である。其等の中でも特に活動したのは、蒙古人と土耳古人で、其の行動は赫灼として輝いて居る。然らば何を以て歴史上に有名になつたかといへば、此等の民族は元來遊

Ural Altai.

Tunguses.
Magyars.

赫灼

遊牧

認見

土着

下手

牧を業とし、殺伐で、勇武を以て四隣に鳴つたのである。即ち武力で他人種を掠めることが、此の民族の古來の習慣であり、事業であつて、侵入掠奪が此の民族の國民性として固定した。近頃歐洲人が日本の勃興を視て黃禍説などを唱ふるのは、古へ土耳古人や成吉思汗の蒙古人が、盛に掠奪を行つたのを想起したので、蒙古人といへば亞細亞人全體を指すものと思つた謬見に基づくのである。

亞細亞の南方にある黄色人の代表者は、いふまでもなく支那人である。此の國民は太古から土着であつて、平和を好み、どこまでも文化文物を尊崇する人種である。此の人種は北方人種と違つて戦争は下手であるが、文化の點に於ては、總べての黄色人中、此の民族の右に出づる者は無い。併し此

保守的

の民族も周時代から二千何百年間は、殆ど變らない。それは何故であるかといふに、始終北方民族から武力で侵害せられるので、自分の出來上つた風俗、習慣、文物等を固く守つて、社會組織が崩壞されぬやうにしなければならぬ。それで總べてが保守的にならざるを得なかつたのである。

中和

さういふ譯で、亞細亞の北の民族は武に偏し、南の民族は文に偏し、いづれも武と文に固つて、保守的の民族となつてしまつたのであるが、獨り我が日本民族のみは此の兩民族の中間に位し、又地理、風土の上に於て中和を得、且大陸から離れて獨立を全うし得たが爲に、其の發展進歩の上に於て、大陸の兩民族とはまるで違つた徑路を取ることが出來たのである。

徑路

(一)古事記や日本書紀。

茫邈

元來我が日本民族は大陸から渡つて來たものに相違ないが、亞細亞の南北の兩人種が、此の島に渡つて混和するに至つたのは、一般の學者の信じて居る所よりも、ずつと古いこと(一)で、神典などに書起されてある年代よりも、遙かに前の事と思ふ。それで其の本源はしかとは分らないけれど、有史以前の茫邈たる太古に屬すること、其の頃の日本人は、ごく開けない民族であつたと想像される。茲に之を詳しくいふ事を避けるが、例へば數の數へ方などは極めて原始的な遣方で、日本人は片手で以て減法を行ふことを知らず、両手で以て加算しか出來なかつた人種であつた三と六、四と八などいふ倍數の言葉が、皆同一列にあることなどが之を證明する。此の原始の日本民族は、極めて幼稚なものでは

接觸

あつたけれども、併しなからなかく、發達する能力、非常なる發展力を持つた民族であつた。それで此の民族は他の國と接觸すると、何時でも其の長所を採用して、自己の發展に資することを得た。即ち初には朝鮮の文化を採用し、次いで支那の文化を採用し、又支那を通じて印度の文化をも採用した。而して西歐との交際が開ければ、盛に西歐の文化を採用する。外國の文化に同化さるゝこと日本人より甚だしきものは、世界に殆ど其の例を見ない。それで今日に於て、日本固有の古き風俗が如何であつたかといふことは、之を求むることがむづかしい。古來の朝廷の儀式に用ひられた衣冠、東帶は、日本固有のものかといふに、之は支那のものである。今日の禮服は西洋のと同じものである。外國の長を採つて

衣冠

東帶

本據

我が短を補ふといふのが日本の國是であり、日本人の國民性である。日本がよく外國に同化し、又時代に應じて變化することが出來て、固定保守に陥らぬことの出來たのが今日の日本のある所以である。それで日本民族は外國の文化に興味を有ち、自分より優れたるものがあれば、直ちに之を採らうとする。随つて極めて平和を好む人種である。これは日本の寶典とする神典を研究してもよく分ること、我が皇室が慈愛を本源とし、平和を主義とされることは一點の疑もない。高天原を以て慈愛の本源として之を尊び、其の反對なる黃泉の國を以て殺伐の本據として之を卑しんで居るのを見て、之が證明される。即ち大體からいふと、我が國民性は文を重んじて武を輕んじたものといふ事も出來る。此

道德心に訴へる

の點は大いに亞細亞の南方民族の代表者たる支那人に似て居るけれども日本人が一朝自分の道德心に訴へて、正義に背いた宥すべからざる行爲と認めたり、又は一身一家、一國の爲に止むを得ぬと認められた場合には、非常に勇猛なる氣象を發揮する。外國と戦争などをする場合に當つては、平常の平和を好む性質が一變して、成吉思汗の蒙古人の如く猛烈になる。其の猛烈なることは、古來の歴史、近くは日清、日露の両役を見ても分る。これだけを見れば、全く古への土耳其人や蒙古人に劣らぬ。それで黃禍説なども起るのであらう。けれども武が日本人の本領と思ふのは、全くの誤解、根本的謬見である。平和を好み文化を愛するは日本人の本態であつて、干を執り戈を揮ふは日本人の變態である。約言すれば、

本領

約言す

日本人は亞細亞の南方民族の文化を主として、之に加ふるに北方民族の勇武を以てし、南北兩民族の長所を調和したのである。

三 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり。東亞の伊太利なり。山川の風景行く所として佳ならざる無きが中に、殊に衆美を聚め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本の總べての景をエキスにしたるもの。規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、曄麗幽婉の形態は備へざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、氷室、鷹が峰、高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて

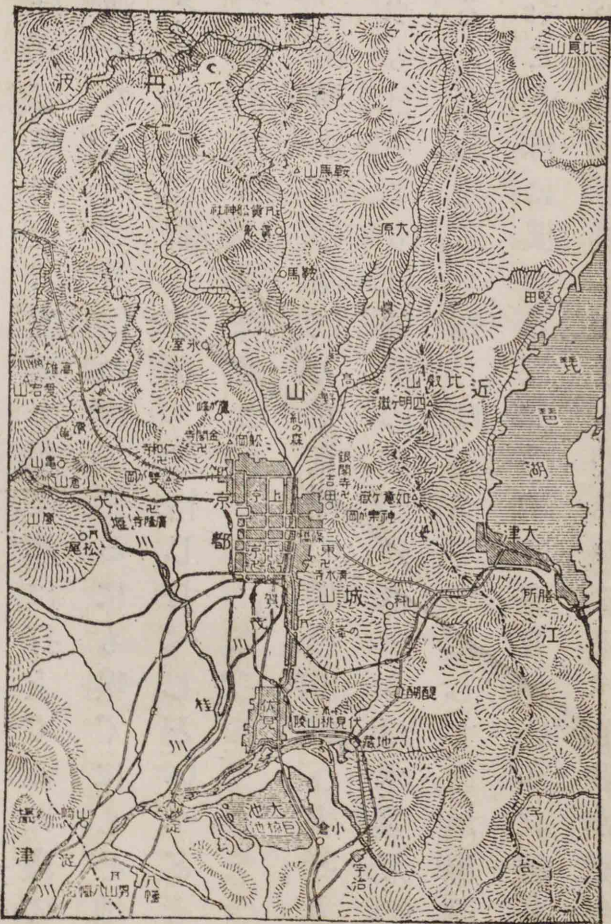
曄麗幽婉

子の日の遊
宮柱太知る

愛宕、小倉、龜山、嵐山、松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日、夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が岡は、大和の故傍、香山、耳無の三山の如く近く相並びてあらねど、子の日の遊に小松曳く樂みなど、いづれ劣らぬところから、南に稍隔りて男山之に對し、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

京の東端には賀茂川の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に桂川、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しく亦南に向ふ。二川南に合し、更に淀の急流に流

浩蕩
跌宕
勾配



跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しといへども、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは又それだけの長所無くんばあらず。地勢の勾配稍急なれば蘆間に入出入る白帆の、

れ込み、沈沈として西の方難波をさして走る。茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀無く、

Alkali.

町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の礦物を含めるにや、曝す布をも、人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしといへども、海なくして清き京都は益、清きなり。

山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も日中よりは朝夕の姿態の面白きは水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして、土地濕潤、水分を含むこと殊に濃なる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明らかなるべし。我が數年の滯留中、

山河襟帶

下京より吉田に通ひたる朝な夕の景色は、今もなほ恍惚として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ、彼方へくと淡くなりて、向ふに寝たる東山はあるか無きかの夢よりいまだ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまつ朝靄を漏來る。時雨の景色の又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は去りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

— 國文學全史 —

(一)大正四年十一月。

仙洞御所

四 大嘗祭

(一)十日の即位禮から引續いての好天氣、大禮日和といふ語さへ出來た。十四日の夕方から仙洞御所内の朝集所に參集。世界に類の無い森嚴な大嘗祭は、夜を徹して行はれるのである。控所は幾室にも分れて、眩い程の電燈の光、一々呼上げる官氏名の順序によつて、左右二列に分れて、大嘗宮南板垣門内の幄舎に着席する。電燈を籠めた數箇の燈籠がほんのりと明るい。大嘗宮の柴垣が微かに認められるだけである。火焚屋に燃ゆる庭燎は、時に明るく、時に暗い。一同の着席が濟むと、薄明るい燈籠の火も消されて、ぬべたまの闇の夜である。

庭燎

一聲長い笛の音が樂舎から起つて、稻舂歌が高らかに吟

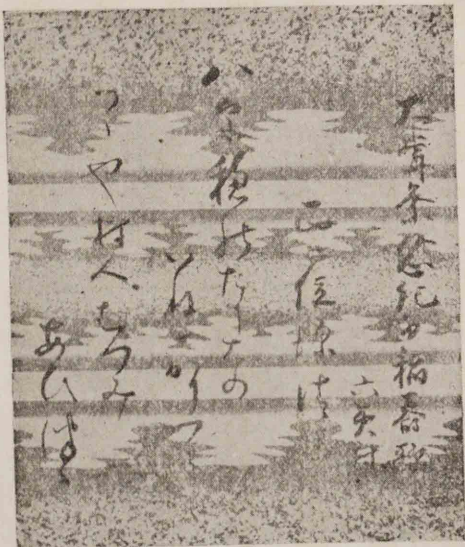
國風

大嘗祭悠紀
方稻舂歌
正六位
源清綱

八束穗のた
りほのいね
をかりつみ
てつくや村
人むつみあ
ひつゝ

端坐凝念

廻立殿



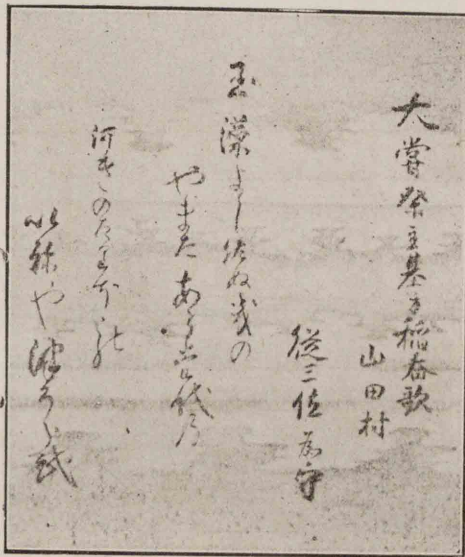
筆にび並詠綱清田黒

ぜられる。徐に嚴かな調子で、神々しさが身に沁むやうである。稻舂歌が終つて、稍しばしの程を経て再び歌聲が起る。今しも國栖の國風が奏せられるのであらう。つゞいて風俗歌が歌はれる。大禮使の官人が起立、着席を呼ぶ毎に、或は起立し、或は着座する。闇に包まれた千餘人の參列員は、端坐凝念して、身は宛ら神代の昔に返つた心地である。今は掌典長の祝詞が濟み、廻立殿からの渡御もあつたのであらうと、御祭の次第を想像し奉るにも、森嚴な氣が刻々に迫る様に覺える。余

が着座したのは左方の幄舎で、折しも八日か九日の月が松の葉越しに白砂の上を照す。折々一陣の寒風が吹いて、古雅な單調の樂の響が、いつまでも斷えず續くのである。聖上には正に天神地祇を奉請あつて、御對坐あらせられるのである。樂の音の外には人の音は全く無い。眞に莊重嚴肅を極めたものである。此の莊重嚴肅な御祭は、太古さながらの建築を傳へた大嘗宮の中に行はれて居るのである。かくて悠紀殿の御祭が終つたのは十一時二十分の頃であつた。

大嘗祭主基
方稻春歌
山田村
從三位
爲守

玉藻よしさ
ぬきのやま
だあらた代
のあきのた
りほのいね
やつくらん

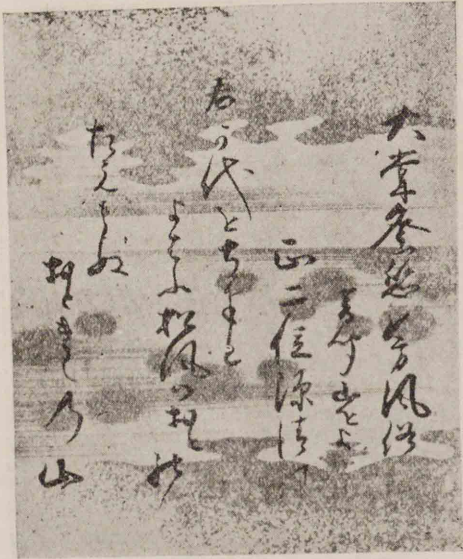


筆にび並詠子守爲江入

朝集所へ立戻つて、夜食を賜はる。暖い御酒、熱い吸物、幾度か朱の御盃を傾けて、夜寒も忘れ果てる。十五日の午前一時

大嘗祭悠紀
方風俗歌
音聞山を
よめる
正二位
源清綱

君か代をら
よもとよば
ふ松風のお
とのたえせ
ぬおとき
の山



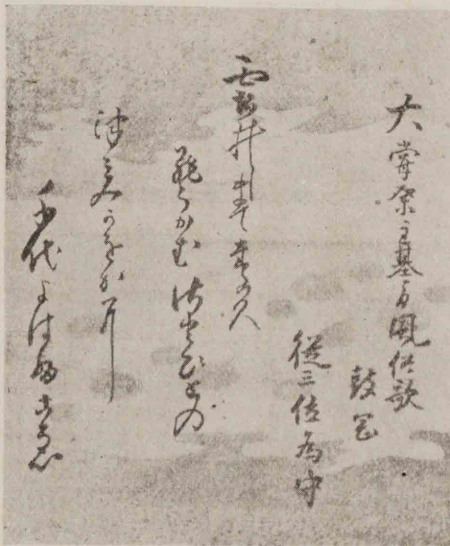
筆にび並詠綱清田黒

三十分一時間、次第に身に沁むと共に、嚴肅な氣分は一層に加る。樂の音が止んで、御祭の果てたのは、午前五時二十分であつた。朝集所に退下して、再び御酒、御食を賜はる頃、東の空

は漸く明るくなつた。

十日の即位の禮には、賢所大前の儀にも、紫宸殿の儀にも、外國の使臣も悉く參列した。それは朝日の輝く御宮、夕日の

照す大庭に行はれたので、莊嚴であり、雄大であつた。それに引きかへて大嘗の大御祭は夜陰の中に行はせられる。參列の臣僚は柴垣を隔て、肅然として陛下の夜を徹しての親祭に侍坐するのである。唯「森嚴」といひ、「神々しい」といふより外に、形容の語は無い。即位の大禮に於ても、遠き國史を想ふの念



入江爲守子詠並に筆

大嘗祭主基
方風俗歌
從三位
爲守
雲井までた
かくひひか
んさと人の
つとみがを
かに千代よ
ばふ聲

は油然として湧いた。春興殿前の威儀の人紫宸殿前の大小錦旗古き國史の跡を考へて、いよ／＼國家の昌運を欣慶するの情に堪へず、今より六十餘年前に御建築になつた紫宸殿に對し奉つては、殊に最近五十年來の皇室の隆運を默想し奉らざるを得なかつた。此の太古の儀によらせられた大嘗祭に於ては更に國史の各時代を超越して西洋の文明は勿論、唐土、三韓の文化も入つて來ない神代の昔を追念して我が國體の尊嚴無比なことを、今更のやうに感激するのであつた。

いそのかみ古りし神代の神業を
をろがみまつるけふのかしこさ

五 テニスの試合

尾崎喜八

(一)慶應義塾大

學

本詩は正

年十月は

し同大學

京高等師範

校との試合

歌へるもの

(二)Tennis,

(三)Court.

(一) 大學の運動場で、

(二) テニスの試合をやつてゐる。

(三) コートのまはりは見物で一ばい。

其の長方形に密集した人垣の中で、

球が縦横にぼん／＼飛ぶ。

四人の選手が綾にみだれて、

堅く平かなコートの上を、

飛んで来る球にしたがつて前進し、後退し、

右に駆け、左に走り、

白いラインの内側の世界に、

はげしい熱氣の火花を飛す。

(四)Tennis

夕暮に近い空氣のさわやかさ。

太陽はうしろの森の頂に見える尖塔の上に、

めづらしく朗かな一日の、

親しみある、また莊嚴な顔をして、

其のあたりの空間に金を播きちらしてゐる。

むかふの東の空の淡桃いろの雲、

また其の下の杳かなはなだ色、

見わたすかぎり天も地も、

ひろ／＼した秋の静けさ美しさに、

水のやうに満されてゐる。

試合は刻々に熱して来る。

両軍の選手の表情には、

次第に決然としたものが加つて来る。

見物の注意は、

飛びちがふ球の方向と、

それに應ずる選手の稲妻のやうな動作の上に

熱を帯びて集中する。

サーヴの手堅い撃ちこみ、

両脚を開いてあらゆる難球を受止めようと身構へる

前衛の決意と確信とのまなざし。

打てば直ちに突進し、

又はすばやく後退する飛鳥のやうな其の運動。

球の性質を咄嗟に見て取る其の俊敏な頭腦と眼と、

腰をひねつて横に拂ひ、

まなざし

Serve.

白熱

飛びあがつて叩きこみ、

又片足を引き、両脚を山形にふんばつて、

飛來する球をすくひうちする其の颯爽たる姿勢。

實に其のあらゆる瞬間が白熱であり、

尖銳に尖銳した注意が、

修練の妙味と相俟つて、

看る者を驚歎せしめる技倆をあらはす。

しかも當の選手は、

眼中たゞ一個の輝く球があるのみだ。

むしろ球の速度、それに與へられた廻轉の方向、

其のバウンドの方向の意識があるのみだ。

彼等自身球となり、ラケットとなり、

Bound.

Racket.

氣魄
犖猛

(Violin.
Staccato.

又ラインとなつて、ちよつとの間隙もない。
 其の緊張し切つた體軀と神經の共同動作の美しさ。
 彼等四人の打ちこみ打ちかへす氣魄の猛烈さ。
 そして輕快な球。犖猛な球。
 笑つてゐるやうな球。怒つたやうに見える球。
 又ばらくに碎けて飛散るかと思はれるラケットの
 激烈な打撃。
 又^(一)ヴィオリンの頓首^(二)のやうな其の微妙な一あて。
 一切の技術と頭腦と運動とが其處に現出するものは、
 悉く一個の白熱した力である。
 此の氣魄を讚美する。
 此の白熱を讚美する。

これは單に遊戲でありながら、
 此處に捲きおこされたものははや遊戲ではない。
 眞劍そのものである。
 あゝ、眞劍を讚美する。
 男子の眞劍を讚美する。
 勝負の如何ではない。
 問題は眞劍であることだ。
 人間のあらゆる生活に於て、
 藝術のあらゆる製作に於て、
 此の眞劍さの現れる時、
 それは人を動かす力の美となり一つの勇となつて、
 肉迫せずには濟まなふと思ふ。

六 秋冬の句

白露や無分別なる置きどころ
まざくといますが如し魂祭
明月や池をめぐりて夜もすがら
ものいへば唇さむし秋の風

宗因
季吟
芭蕉

角力とり並ぶや秋のから錦風雪



風雪筆蹟

稻妻やきのふは東けふは西
黄菊白菊その外の名はなくもがな
牛叱る聲に鳴立つ夕かな
小坊主の門に立ちけり秋の暮

其角
嵐雪
支考
闌更

應々といへどたたくや雪の門去來

秋風や白木の弓に弦はらん
山は暮れて野は黄昏の薄かな
鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
金屏の松の古びや冬ごもり

去來
蕪村
芭蕉



去來筆蹟

あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲
蒲團着て寝たるすがたや東山
蕭條として石に日の入る枯野哉
大根引大根で道ををしへけり
水仙にたまる師走の埃かな

其角
嵐雪
蕪村
一茶
几董

犬を打つ石のさてなし冬の月
大晦日定めなき世の定めかな

太 祇
西 鶴

七 武藏野日記

國木田獨歩

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を
拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間を洩るゝ時、林影一時
に煌もやもやく——」

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑の
其のまゝでありながら、空模様が其と全く變つて来て、雨
雲の南風につれて、武藏野の空低く頻に雨を送る。其の晴
間には日の光が水氣を帯びて、彼方の林に落ち、此方の杜
に輝く。自分は屢思つた。こんな日に武藏野を大觀する事

變幻

が出来たら、如何に美しいことだらうかと。二日置いて九
日の日記にも、「風強く秋聲野に満つ。浮雲變幻たり。」とある。
ちやうど此の頃はこんな天氣が續き、大空と野との景色
が間斷なく變化して、日の光は夏らしく、雲の色、風の音は
秋らしく、極めて趣味深く自分は感じた。

まづ之を今の武藏野の秋の發端として、自分は冬の終
る頃までの日記を左に並べて、變化の大略と、光景の要素
とを示して置かうと思ふ。

九月十九日——「朝、空曇り風死す。冷霧寒露、蟲聲しげし。天地
の心なほ目ざめぬが如し。」

同二十一日——「秋天拭ふが如し。木葉火の如く赫く。」
十月十九日——「月明らかに、林影黒し。」

朝まだき

同二十五日——「朝は霧深く、午後は晴る。夜に入りて雲の絶間の月牙ゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で、野を歩み、林を訪ふ。」

睽視す

同二十六日——「午後林を訪ふ。林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睽視し、黙想す。」

十一月四日——「天高く氣澄む。夕暮に獨り風吹く野に立てば、天外の富士近く、國境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一點、暮色漸く到り、林影漸く遠し。」

同十八日——「月を蹈んで散歩す。青煙地を這ひ、月光林に碎く。」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷かなり。満目黄葉の中、綠樹を雜ふ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み黙思口吟し、

足に任せて近郊をめぐる。」

同二十二日——「夜更けぬ、戸外は林を渡る風聲もの凄し。滴聲頻なれども、雨は已に止みたりとおぼし。」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉殆ど揺落せり。稲田も殆ど刈取らる。冬枯の淋しき様となりぬ。」

同二十四日——「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消入らんばかり懐かし。」

同二十六日——「夜十時記す。屋外は風雨の聲もの凄し。滴聲相應ず。今日は終日霧立罩めて、野や林や永久の夢に入りたらん如し。午後犬を伴なうて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水林より出でて林に入る。落葉を浮べて流る。をりをり時雨しめやかに林を過ぎて、落葉の上を漲りゆく音靜

かなり。

同二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく霽れ、日麗かに昇りぬ。屋後の丘に立つて望めば、富士山眞白に連山の上に聳ゆ。風清く氣澄めし。げに初冬の朝なるかな。」

田面に水溢れ、林影倒に映れり。

十二月二日——「今朝霜雪の如く、朝日にきらめきて見事なり。暫くして薄雲かゝり、日光寒し。」

同二十二日——「雪始めて降る。」

一月十三日——「夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻に降る。燈をかかけて戶外を窺ふ。降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武蔵野沈黙す。而も耳を澄せば、遠き彼方の林を渡る風の音す。」

果して風聲か。

同十四日——「今朝大雪。葡萄棚墜ちぬ。」

夜更けぬ。梢を渡れる風の音遠く聞ゆ。あゝこれ武蔵野の木より木を渡る冬の夜寒の用なるかな。雪どけの滴聲軒をめぐる。」

同二十日——「美しき朝。空は片雲なく地は霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。」

二月八日——「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三月十三日——「夜十二時、月傾き風急に、雲涌き林鳴る。」

同二十一日——「夜十一時。屋外の風聲をきく。忽ち遠く、忽ち近し。春や襲ひし冬や遁れし。」

— 獨歩全集 —

八 伊藤公を誅ぶ

(一) 滿洲吉林省松花江の右岸。

異體同心

金石も雷ならず

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃する所となり、暴かに清國吉林省哈爾賓驛に薨ず。嗚呼、哀しい哉。予何ぞ多言するに忍びん。然りと雖も、予君と交る五十餘年、異體同心、生死患難を共にし、國歩艱難の秋に始り、太平富貴の日に至り、始終渝ること莫く、金石も雷ならず、自ら謂ふ、交友の誼今古に愧づる無し。と予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君予の垂死を哭すること二回、予幸に君の交情看護に因つて、再生するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは、嗚呼、哀しい哉。

(二) 文久三年。
發憤

回憶すれば四十七年前文久癸亥の仲夏、君予と偕に發憤、

内訌

(一) 高杉晉作。長藩の志士の先蹤。

危難

破竹の如し



伊藤博文

海軍の術を學べんと欲し、禁を犯し、潜に泰西に航し居る事僅かに半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に歸り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。内訌尋いで起り、予は暗夜要撃に遭うて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を回復し、我が一大危難を轉過せり。已にして王政復古、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、木戸、大久保二公を佐けて最も力あり。維新の績此よりして破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、其の他法律制度

組織の才

の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となり、勲業の盛を極め、首めに韓國統監となりて、保護の範を立つ。

淬礪
王臣匪躬

君、學漢洋を兼ね、識東西に通ず。最も東洋の平和を以て念とし、常に忠節、道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひ、北滿の野に見學す。忠君報國の厚きに非ずんば、孰か能く此の如くならん。豈意はんや、君の忠節にして、茲の不測に遭ひ、暴かに異邦の地に薨せんとは、嗚呼、哀しい哉。

寧處

白叟黃童

君の訃電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟黃童

環球着望の
盛
振古

織婦、耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才德、勲業を稱讚し、環球着望の盛、振古未だ君の如きに比するあらざるなり。抑、予は又之に因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく舉國一致盡忠報國、東洋の平和を維持するに努め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、匪以報公、維以報國。死者復生、信我此言。と庶はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼、哀しい哉。

老友 侯爵 井上 馨

九 人臣の道

北 畠 親 房

凡そ王土に生れて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。

きはひ争ふ
前車の轍

必ず之を身の高名と思ふべきにあらず。されど後の人を勵まし、其の跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきはひ争ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功もなくして、過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝも理なり。

制符
語らはる

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬すること、を停むべし。といふ制符度々ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから

しいひがひな

多くなりしによりて、此の制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりけり。

言語は君子
の樞機

此の頃の諺には、一たび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を賜へ。もしは、半國を賜はりても足るべからず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事は、あらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり。又朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣、賊子といふものは、其の初め心言葉を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪

堅き氷は霜
を履むより
至る

しくなりゆくを末世とはいへるにや。

—神皇正統記—

一〇 天の逆鉾

橘 南 谿

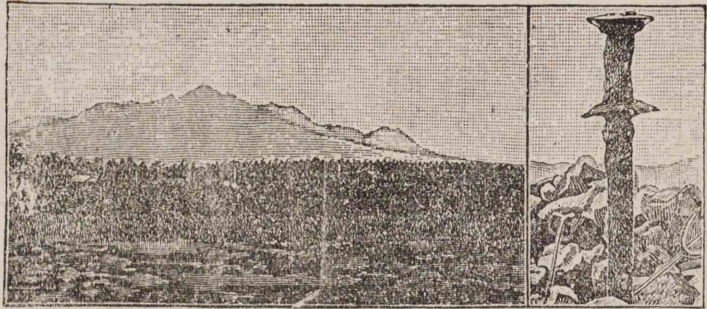
昔あめつち未だ開けざりし時、諾冊二柱の御神、天の浮橋の上より霧の海を詠め下し給ふ。小島の如くに見ゆるものあり、二柱の御神、天の瓊矛を以て是を探り見給ふに國なりければ、則ち此の處に跡を垂れ給ふ。これ霧島山と名づくる由來にして、其の鉾を逆しまに下し給ひしが、今に至り其の儘に此の山の絶頂に立ちてあるを、天の逆鉾といふ。誠に神代の舊物にして、奇絶の品、又外に是に比すべきものなし。

予霜月八日といふに、薩州鹿兒島を立ちて日向國に趣く。海陸二日を経て霧島山に入り、數十丁登りて霧島の宮居の

垂跡

先達

谿達



天の逆鉾と霧島山

前に着く。二神垂跡の地なれば、宮居今に至り殊に美しく、此の近國にての大社なり。伏拜みて黄昏に及びぬれば、傍の山下坊といふ坊に宿す。この坊にて先達の案内者を宵の間に雇ひ、明朝夜の間より登山す。雜樹生ひ茂り、日影だに洩らざる程の山を、しかとしたる道筋も見えざるに、只案内者のあとに従ひ、ひた登りに登る。其の奇樹異草、名も知らず目なれぬ物甚だ多し。五十丁登り盡せば、それより上は樹木一本もなし。只芝の如き草のみ生ひたり。其處に到れば四方谿達とうちはれ、薩隅、日の三州一望の中に入りて、衆山

は波濤の如く、大海は青疊を敷きたるが如し。其の中に櫻島山突然と秀でて、盆石を置きたるが如し。絶頂より白き煙四時に立昇りて香爐の如し。景色無双、筆に盡し難し。さて件の草ばかりの山を登ること又五十丁。それより上は草もなくたゞ栗ほどの焼石許なり。こゝに至つて登り益、急峻なり。さてこのあたりより上、段々登るに随ひ天地の景色漸く變じ、不時に下の方より雨そゞぎ來り、或は風横さまに卷來る。又眺望の暇なし。それより二十丁も登りて、馬の背越といふ處に到る。此の處は登らず、只平に行くといへども、左右皆谷にて、劍の刃の上を行く如く、足の踏むところ僅かに馬の背中程なれば、馬の背越とはいふなり。足を運べば栗の如くなる。焼石左右の谷へなだれ落つ。其の行く處狭きを知るべし。さ

えもいはぬ

て左の方は萬仞の谷にて、底は雲にて眼及ばず。右の谷は深さ三四町、或は五六町にて、谷に満ちて猛火燃上る。此の馬の背越にかゝりて後は、何となく震動して、地軸只今碎け折れて此の山微塵になるやうに覺ゆ。又えもいはぬ腥き氣吹來り、或は墨の如くなる雲渦卷き來り、同行の者さへも一向に隠るゝこともあり。或は前後左右に異形の雲煙現れ、鬼神の如く佛神の如きこともあり。或は足下より虹たちのぼり、縦横にたなびきて、織りなせるが如くなることもあり。又天地と共に金色になることもあり。其の外、奇怪不思議なかく言ふもおろかなり。又折々一陣の風吹來る事あり。此の時は先達教へて、急にうつぶしに倒れ伏さしむ。腹這にならざれば風の爲に此の身を取られて、猛火の中に舞落つるなり。折

ふしは風の爲に取らるゝ者ある故に、此の山にては紛失する人多しといふなり。予も殊に此の風を恐れて、少しの風にも急にうつぶしになり、地につきて、風に放たれざるやうにせり。しばしにて又忽ちに風もやみ、天晴るゝこともあるなり。須臾の變幻定まりあることなし。此の所に取りかゝりしより、同行の若者、さしも勇氣のものながら大いに恐れ、足戦きて立つこと能はず。先達いふやう、今日は山も格別荒し、登山もこれまでなり。これより下山すべしといへば、力及ばず本意なく下りに向ふ。さてそれより僅かに十町ばかりを下れば、天氣晴朗にして、風靜かに、四方の眺望初の如し。

予先達に向ひ、これより絶頂までは道程いか程あると問ふに、馬の背越の長さ八町、それを過ぎて急に登る處十町許

もやあらんといふ。それならば僅かの道なり。紛れ道やあると問ふに、両方谷なれば、紛るべき道なしといふ。さらば餘りに残念なれば、予は獨歩して絶頂に登るべし。此の處に若者を守り居て、われが下り來るを待ちくれよ。これより下は案内なくて、は一步も進み難ければ、返すゝも頼むなりと言捨て、とゞむるをもきかで、足をはかりに登りしに、件の馬の背越に至れば、天地忽ち變じて初の如し。先達が教に任せ折々は俯伏になりて風を避け、千辛萬苦して馬の背越八丁が間を走り抜けたるに、先達が言ひし如く、それよりは眞直に登る所あり。此の處に到れば、天地又常の如くにして奇怪なし。只息を限りに登る程に、遂に絶頂に到れり。絶頂は尖りて、僅かの地面に天の逆鉞あり。これを見得し時の嬉しさ、何

にか譬へん。逆鉾の有様、風霜にさらされ、青く錆びて、しかと
知れ難し。長さ一丈餘りばかり、太さ大なる竹程にて、倒に地
中に立ち、其の石突の端の所に、南面に鬼面の如きもの見ゆ。
神代の舊物なりや其の程は知らずと雖も、實に三百年五百
年位の近きものとは見えず。天下の奇品なり。暫く此の絶頂
を徘徊するに、天氣晴明にして、四方眼の及ぶ限り見え渡り、
其の心地よきこと今に忘れ難し。されどもかゝる所は久し
く留るべきにあらざれば、急ぎ下りたるに、馬の背越に至れ
ば、また初の如く天地晦冥して、怪異益甚だし。悉く筆に盡す
べきにあらず。恙なく馬の背越を越えて、ひた下りに下るに、
遙かの下に先達、若者かすかに見えて、大きき豆の如し。嬉し
くて急ぐほどに、下るとはなしに滑り落ちて、須臾の間に二

人の前に着きぬ。恙なかりし事のみ共に悦び、其の夜暮過ぐ
る頃、宮居の傍の坊に歸りぬ。
—西遊記—

一一 雨の興

松平定信

「月の夜半こそ思ふ隈もなく、心の底も澄渡りぬるものな
れ。されど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに、風高く吹
きかふは、又優りぬるやうに覺ゆ。」といへば、雨ぞいと優りぬ
るを。」といふ。いかにと問へば、「いでや旱天の雨は更なり草木
の花咲き實のるも、皆この恵にこそあんなれ。又其の感情の
深さをいは、今日は元日なりけりといふに、雨そほ降りて
霞み渡りたるは、げに春かなとぞ思ふめる。師走の晦のどや
かに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて春は雨こ

軒の玉水
蜘蛛のい

そ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣潤せども、降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、住棄てし蜘蛛のいに玉ぬく景色、庭の面の枯生の底に緑稍添行くも、柳の絲の動きもやらで露添ふも、共にいと長閑なり。燈火挑^かげて、何となく光濕りたるに、鐘の音のほのかに響き來るも、心澄渡りぬるぞかし。その外梅が香の濕り、夜深く匂ひ渡るも、花に憂しと歎ちぬるも、哀れはありけり。春も老いゆく頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。郭公の初音いかにと思ふ頃、村雨のはらくと降出でたるも、五月雨の幾日も降暮して、書の卷々繰返しつゝ居たれば、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。又暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風一しきり吹落ちたるに、柳、蓮などの

打守る

繰言
とよむ

葉裏白く見せたるも涼し。やがて大きやかなる雨の間遠に落ちたるが、後には頻に降來て物音も聞えず、土の匂ひ來るもいと心地よし。軒端は玉の簾かけたらん様に、玉水の絶間なく落ちたるに、庭は一つ湖になりて、あるは瀧落し、又は水走らせたるに、人々暫し物いはで、打守り居たるもをかし。稍雲薄くなれば、池の面には數ふるばかり雨見えて、小鳥など庭へ躍り出でて餌拾ふ様なり。初め雲の立出でし方は、はや空の一角縁に見えて、虹など見ゆるに、木々の緑の庭^{はな}涼^{なみ}に影見ゆるもいと涼し。老いたる女など雷^{かみ}の音に驚きて這出でたるが、『今日のは幼かりし時のごとよく霽れにけり。今時のはかく霽るゝ事稀なり。』など、はや繰言いふもあり。『彼はかくあわてし。』など、かたみにいひて笑ひとよみつゝ、『今日は

蚊も少かるべし。雷の音もいと微かなり。この頃の暑さも忘れぬ。』とて、端近う出づれば、夕月の光さし渡りて、草木の露も玉なすに、肥え膨れたる蛙の、物待ち顔に空打睨みてふつゝかなる音に鳴くもをかし。秋來る頃の雨は、昨日に變りて何となう淋し。萩の上風、外山の鹿の音など、月よりも身に沁む心地とする。常に聞馴れし、笕の水の音までも、哀れ深くこそ。月の前の村雨も亦をかし。まいてや、夜寒の頃、鳴枯したる蟲の音の、雨のをやみに幽かなる聲して、枕近く鳴きよるも哀れなり。この雨に木々も染めなんと思へば、『茸なども生出でなん。栗もはや落つべし。』などと、童の物淋しげに燈に向ひつゝ言出づるも、げに様々なり。夜深き鐘の音の打濕るものから、さすがに秋は聲冴えて聞ゆるにぞ、今は世に亡き友

つきくし

しおごろく

の事も思出でて、鐘撞く人の心をも哀れと思ふばかり、感情は深かりけり。紅葉の染添ふも、白菊の移り行きて一盛見するも、尾花の露重げに打萎れたるに、龍膽の怨深く咲きたるあたりもつきくし。朝顔の皆枯れたる中に、さゝやかに赤う咲出でたるが、晝過ぐるまでも凋み後れたる、亦哀れなり。野分の風はおどろくしきものから、雨は夕立に劣らざれど、さすがに哀れを添ふるは、秋の習なるべし。時雨のさと音して、夕日に白く降來るも、又音かへて枕とふもをかし。月よりも、闇の夜よりも、哀れ深きものには侍らずや。』といへば、かうやうにいひ並べては、げにもといふべからんが、一年も降る心地してよみ見れば、この雨はをとつ日より降出でしをと思ふ心は變らじと、心の中に思ひて聞居しも、亦をかしか

りけり。

—花月草紙—

一二 雪前雪後

幸田露伴

雨も好し、露も好し、霰も霽も天より降るものゝ面白からぬは無きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰色の雲の大空を蔽ひて風無き寒さに、雀ふくらむ程はともあれかくもあれ、そと下す風に連れて、ちら／＼と降出づる始より、軒の玉水日に燿ふ光長閑に融け盡す終まで、いづれかをかしからざらん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に冴ゆる音立て、檜の葉に堅き音立て、板庇には痛く跳返りなどしつゝ、さらさらと降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪

鹿子斑

天華

の大きく軽らかに降りて、落つる間もなく色無き水の昔にかへる淡々しさも懐かしく、消ゆる／＼も少しは積りて茅葺の屋根に鹿子斑の夏の富士を見せ、松、梅、樅などの梢には天華俄に落ちかゝるかと思はしむるも趣あり。

されど降る最中の雪の見て美しきは、冬の末かけて春の初の頃、陽氣既に動きて陰氣猶いと盛なる時の事なり。寒さ甚だしからねば雪細かならず、暖さいまだしければ、雪は水めかずして恰も好く、且大きく且軽やかなるに、しかも一年の中最も降るべき折なれば、其の霏々紛々として盛に下るに當つては、櫻花の春天に飜るが如く、蘆絮の秋風に漂ふが如く、一江の野渡には、對岸を虚無に封じて仙境の縹緲を欺き、半衢の陋街には、連屋を瓊瑤に包んで蜃樓の巍峨を疑は

しむ。鶴毛亂れ飛び、鶯毳うぐいす飄り零つる景色、見る眼もあやに美しき限りなり。

すべて降る時の眺には、廣き處より狭き處好し。玉屑、珠塵いと清きことは清けれども、もと色を奪ひ光を障ふるものなれば、降りしきる真中は、遠きは全く見えずして、廣きは却つて狭くなり、近きは聊か霞みて、狭きは却つて廣くなり、大川よりは山間の溪、廣野よりは市中の園よろし。

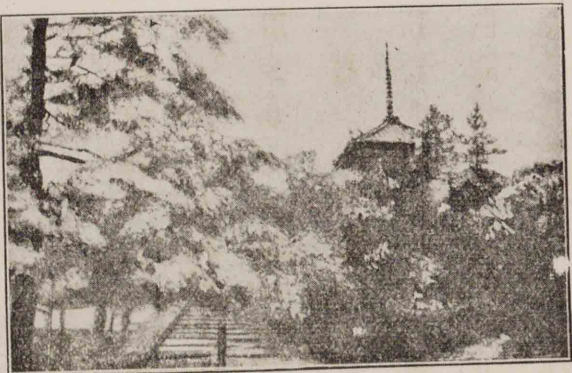
霽れての後こそ雪は目ざましけれ。塵埃拭ひつくして、鏡新に明らかなる、空の蒼々と朗かなるが下に、渣滓鍊去つて白銀曇なき地の皎々と白きが、見る眼もはゆく遙かに開けたる、常の日はたゞ裾寒き風の枯草を吹くのみなる空野の、取りどころ無きだに面白くおもはる。馬をさへ眺むると人

(一)馬をさへ眺むる雪のあしたかな。芭蕉

のいひたる且、朝日の光いと華やかなるに、疎林に禽起つて

飛んでまた還る、有りふれたる郊外の様ながらもよし。

真如堂の寫
西の京は金閣銀閣、真如堂岡崎、東山、清水、みな畫とすべく、梅尾、榎尾は見ねば知らぬぞ口惜しき木曾の寢覺の床の、巖は鬼斧に任せて千古冷かに峙ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋梢重く、壁の簷を戴ける松の村

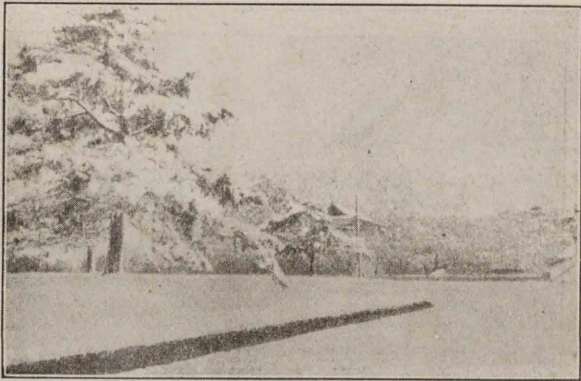


(一)長野縣福島町の南方二里餘。

立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと、二十年の昔の、余の胸に猶鮮なり。

(一) 鐘町區に在る小丘。丘上に日枝神社あり。もと山王臺の東南麓。今宅地となれり。

(三) 隅田川の右岸。淺草公園に近き小丘。



宮城前の雪

東の京は御溝の水穩に、浮寝の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午またたぐひ無くめでたし。山王臺今猶好か

川は待乳山を望みたるも好し山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧、四方の白實に武藏野を分きて流る、川なりと稱ふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども南に涯無き海をすかして、海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ、樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。 — 洗心録 —

らんが溜池の有りし昔いたづらに懐かし。不忍の池一望千頃の景はいはずもあれ、石橋の小さやかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさゞめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとやいふべき。隅田

(一) 深川區越中島より京橋區新堀島に架す。越中島の一

(三) 姓は橋。國學者、歌人。江戸の人。賀茂文化五年(一四六八)歿。二

(四) 平安朝の歌人。字多醜。醍醐朝頃の人。

一三 四季の和歌 其の一

加藤千蔭

二見瀉こち吹く風に明けそめて

かみよのまゝの春は來にけり

凡河内躬恒

(一) 國學者。元祿十四年(一七三六)歿。三十二。

(二) 歌僧。俗稱良峰。立利。清和天皇に仕ふ。

はるの夜のやみはあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

契^(一) 沖

霞とも雨とも空はわかぬ間に

つらぬきそむる青柳のいと

素性^(二) 法師

みわたせば柳さくらをこきまぜて

都ぞ春のにしきなりける

藤原俊成

駒とめてなほ水かはん山ぶきの

はなの露そふ井手のたま川

よみ人しらず

をしめども春の限りの今日の日の

夕暮にさへなりにけるかな

持統^(一) 天皇

春すぎて夏來にけらし白たへの

ころもほすてふ天の香具山

紀貫之^(二)

なつの夜はふすかとすれば時鳥

啼く一聲にあくるしのゝめ

源頼政^(三)

庭の面はまだ乾かぬに夕立の

そらさりげなくすめる月かな

藤原家隆^(四)

(一) 第四十一代。后。武天皇の皇。大寶二年(一三六二)崩。御年五十八。

(二) 歌人。古今和歌集を撰す。天智九年(一六〇二)歿。

(三) 武將又歌人。治承四年(一一一四)平家八四〇を滅さんとし、て敗死す。年七十七。

(四) 歌人。新古今和歌集の撰者。嘉祿三年(一一八七)歿。年八十。

かぜそよぐならの小川の夕暮は

みそぎぞ夏のしるしなりける

松平定信

心あてに見し夕顔の花ちりて

たづねぞ侘ぶるたそがれの宿

一四 四季の和歌 其の二

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

かぜの音にぞおどろかれぬる

賀茂真淵

あきの夜のほがらくと天の原

照る月かげに雁鳴きわたる

藤原俊頼

松風のおとだに秋はさびしきに

ころも擣つなり玉川のさと

藤原定家

みわたせば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋のあきのゆふぐれ

藤原良經

人すまぬ不破の關屋の板びさし

あれにし後はたゞ秋のかぜ

小澤蘆庵

くりも急み柿も色づきうなるらが

(一)歌人。延喜七年(一五六七)歿。

(一)歌人。堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕ふ。金葉和歌集の撰者。

(二)俊成の子。新古今和歌集の撰者。仁治二年(一九〇一)歿。年八十。

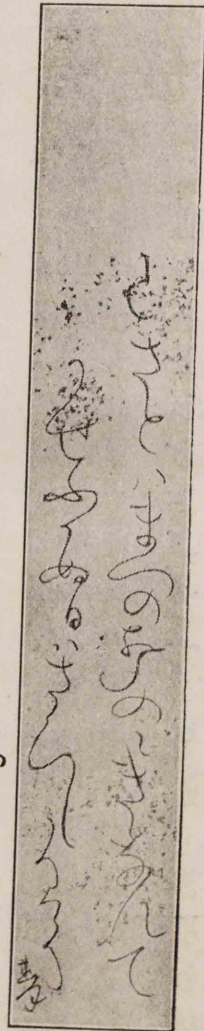
ほこらしげなる時は來にけり

讀人しらず

神無月ふりみふらずみ定めなき

しぐれぞ冬のはじめなりける

太田垣蓮月(一)



蹟筆月蓮

香川景樹(二)

照る月の影の散來るこゝちして

よる行く袖にたまる雪かな

(一) 女流歌人。京都に住す。明治八年歿。八十三。年明
山ざとはま
つきのなれ
かきふかぬ
かぜなれぬ
日はさびし
かりけり
月

(二) 江戸時代京都の歌人。天保十四年(二五〇三)歿。年七十六。

一五 獨創力

三宅雪嶺

元旦は世界各国で年の初を祝するものであり、紀元節は日本帝國の起りを祝するものである。何處でも建國祭の如きことがあつて、日本在留の米國人も、七月四日(一)に祝賀することに定まつて居る。日本の紀元は歴史上の穿鑿で幾分の疑問があるが、とにかく、日本帝國は二千數年前(二)に成立したに相違なく、其の以後種々の變遷がありながら、漸次發達し來つて居る。他の東洋諸國は發達を續けず、退歩せぬまでも停滯した形であるが、獨り日本は發達を續けて來て、一旦外國と接すると共に愈發達し、遂に之と對等の地位に進んだ。若し一層早く列國と交つて居つたならば、更に發達の跡が著しかつたであらう。日本には發達の素質がある。

(一) 米國獨立祭日。

停滯

紀元節は國家の紀元であるが、紀元といふ事は何事にもある。多數が記憶すべき大紀元があり、少數が記憶すべき小紀元があり、一家一人亦各紀元がないとはせぬ。誕生日は個人の一紀元である。明治元年は國家にも、社會にも、種々の點で一の紀元になり、二十二年の憲法發布も、一の紀元になつて居る。汽車には汽車の紀元があり、電信には電信の紀元があり、其の他製鐵に、紡績に、皆夫々紀元がある。ニウトンの重力発見なり、^(一)ダルウヰンの自然淘汰説なり、亦皆紀元を作つて居る。

紀元に種々あつて、一樣にいへぬにしても、何等か前に無かつた所が、新に知れ渡るのを意味して居り、稍神の創造に類する。傳説に據れば、昔神が「そこに光あれよ。」といつたので、

Sir Isaac Newton, 英國の數學者 一六四二—一七二七)
 Charles Robert Darwin, 英國の博物學者 一八〇九—一八八二)

暗闇が明るくなつたといふことであるが、創造とはかゝる類を指すのである。無より生ずると認められる。此の創造に因んで人事の上で創造の語を使ひ始めたが、日本では普通に獨創といふ。

進歩は總べて多少新なる分子を加へるもので、人々の獨創力を發揮するを要する。何處かで何人か、これを發揮すれば、それだけ或進歩を見る。必ず何處の誰と當にする譯に行かず、これを當にしては、其の人が居らねば進歩がないことになる。社會が絶えず進歩するのは或特別の人に由りて遂げられるのでなく、多數の獨創力が集つて現れる結果である。獨創力の目立つものこそ少けれ、目立たぬのは幾らでもある。實は何人でも幾分の獨創力がある唯極めて微弱で、

殆ど全くいふを値せぬ。値せぬけれども確かにある。これが相集つて著大なる事業となることがある。

多數の人が各少しづつ獨創力を發揮すれば、おのづと其の中から著しい力が現れる。新發明の機運といふのは其處である。多數が各自の獨創力を發揮する勢になつて來て居るのを指す。歐洲の近世史は、其の機運の熟したに外ならぬ。中世千年間これぞといふ發見發明なく、近世に入つて、俄に發見發明が數ふるに堪へぬ有様となつた。人々皆從來の儘にして居れず、何とかせねばならぬと考へたり、働いたりするの、かゝる勢となつて現れたのである。東洋は彼の中世と同じ状態であつて、彼の近世の活動に促されて是亦各自の獨創力を發揮しようといふ事になつた。

Christopher
Columbus
(西曆一四三
一五〇
六)

所が日本では東洋第一を以て居りながら、唯歐米の眞似して何等の獨創の見るべきもの無いといふが、これ格別怪しむべきでない。彼の近世史は日本より幾百年も早く始り、其の早く始つたのは、地中海を控へて、航海に熟練する便利があつたのであり、又大西洋が割合に狭くて、早く米洲を發見し得たからである。大西洋が太平洋ほど廣かつたならば、^(一)コロンブスは米洲を發見せず、歸つたか、又は途中で殺されたかして居る。何にしても歐洲では新世界發見といふので人心が興奮し、從來の状態から新なる状態に移るの餘儀なきに至り、夫だけ新發明新工夫を重ね、日本で思ひも寄らぬ事が出來上つた。

日本で後馳せに其の仲間に加つては、新に發明するより

も、出來上つた處に倣ふのが早い既に出來上つて居るのに、わざ／＼自ら苦心して發明するに及ばぬ。出來上つて居る物を其の儘に取るのは、當然のことである。これまで日本に獨創力の現れたもの、少いのは、出來上つた物を取入れるに忙しくて、自ら獨創をする暇がなかつたのである。

水は高い處から落ちて平均しようとする。今日まで文明が平均しようとして居つた。今日でもまだ十分に平均せぬが、肝要なことは略平均して居る。是から獨創の現るべき時になつて居る。學ぶべきものは幾らでも學ばねばならぬが、今は獨創の餘力が生じて來た。此の頃教育を受けつゝある者は、大いに獨創力を發揮すべき運命になつて居る。

所が人は動もすれば獨創の文字に拘泥して、獨り創める

ことゝ解したりする。何とかして、全く前例無いものを始めようと思ひ立つ。しかし特別に飛離れた事を考へねば獨創にならぬと思ふのは間違つて居る。前に人がせつかく苦心慘憺して考へた所の物を、更に繼續して苦心慘憺する所に、後の人の職分がある。前に残した所より、より以上に効果あるやうにすれば、夫だけ後に生れた者の職分を果すことになる。其處に獨創力が現れて居る。

それならば歐米に出來上つた所を學び、少しく改善を加へればよいかといふと、其處は心掛次第である。他を學ぶに専らになれば、依頼心が多くて獨創力が減ずる。他を學びつつ、常に自ら工夫する習慣を作らねばならぬ。文藝上でも頻に歐米の新刊書を読むがよい。併し讀むに専らになつて、甲

羅列す

がかういつた乙がかういつた丙丁はかくくであるといふのを羅列するばかりになれば、所謂習性となり、受賣ばかりになつて、獨創力が萎縮してしまふ。此の類の事に注意を拂ふもよいが、自ら工夫するを怠つてはならぬ。

大戦亂が始つた時、歐洲から機械藥品が到來せぬので、日本内地で造り上げた物が種々ある。前に依頼して居つたのが、依頼出來ぬやうになつたが爲に、かうなつて來たのである。依頼心さへ棄てれば、結構物は成遂げられる。今後はいよいよ此の勢を以て進むべきである。今から新に知識を積み、世に打つて出ようとするものは、此の邊の覺悟を最も肝要とする。

前には獨創力があつても、之を發揮する機運に臨まなか

つたが、今後其の機運が大いに熟する。其の點に於て、現代の青年は希望を以て充ち、春の海を望むが如く祝福し得られる。唯幸福に困難の伴なふを忘れてはならぬ。

—内實の力—

一六 箱王仇に遇ふ

介錯

かくて箱王は、御奉幣のときまでも一人一人も連れず、介錯の僧一人相具し、御座所の後に隠れゐて、御供の人々を、彼はたぞ。此はいかに。」と委しく問ひければ、この僧鎌倉の案内者にて、大名小名の名能く知りたれば、教へけり。されどいまだ祐經をば明さず。あはれ問は、やとは思へども、怪しく思はれじとて、のこりの人を問ひまはす。君の左の一の座はたぞ。」

(一)工藤祐經。

(二)源頼朝。

(一) 畠山重忠。

「彼こそ秩父の重忠よ。」右の一の座はいかに。「此ぞ三浦の義盛なる。」さて其の次は誰ぞ。「里見の源太といふものよ。」さて其の次は「豊島の冠者といふ人なり。」たゞ今物仰せらるゝは誰やらん。「これこそは當時聞ゆる梶原平三景時とて、さぶらひどももの鬼神に思ふものよ。」又めての方に少し引きのきて、半装束の珠數持ちて香の直垂着たるは、いかなる人にてあるやらん。「かれこそ御分たちの一門、伊東のぬし工藤左衛門祐經よ。御分の父河津殿とは従弟なり。御前さらぬきりもの。」とぞ教へける。さてはそれにてありけるよ。此の事思ひ寄りていふやらん。知りぬれども何事かあらんと、思ひこなしていふやらんと、いつしか胸うち騒ぎけれど、思ひ寄せらざる様にて「此のものはよきをのこにてありけるや。三十二三にぞなる

(二) 河津祐泰。

狩場
すまふ

らん。みづからが父にや似たる。」と問ふ。少しも似給はず。まさしき兄弟さへ似たるは少し。まして従弟に似たるものはなし。年こそ河津殿の討たれ給ひし程なれ。其の人のましまさば、四十餘りにてあるべし。これより遙かに丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、後より見ればうつぶき、脇より見れば四角なる大の男にてましく、しが馬の上、かちだち、並ぶ人なし。殊にしゝの上手にて、力の強きこと四五箇國には並びなき大力なり。されば相模の國の住人大庭の三郎が弟、股野の五郎景久とて、相撲に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちてすまふに、三番勝ちてこそ、いとゞ名を揚げ給ひしが、それを最後にて、歸り様にあへなく討たれ給ひき。大力と申せども、死の途には及ばず。」とぞ語りける。箱王

は父が昔をつくくくと聞きて、今更なる心地して、しのびの
涙に咽びけり。

や、ありて、我このあひだ祈りし願のかなふにこそある
べけれ。うかひよりて、便宜よくば一刀さし、いかにもなら
んと思ひ定めて、御坊はこれにましませ。法師こそ寄らね、わ
らんべは近く寄りても苦しからず。山寺に住めばとて、人を
見知らぬはむげなり。近くよりて見知らん。とて、赤地の錦に
て柄鞘卷きたる守刀を脇にさし隠し、大衆の中をぬけ出で
て、祐經がうしろ近くぞ狙ひ寄りける。祐經もしばしの冥加
やありけん、梶原三郎兵衛を隔て、箱王を見つけて、これな
るわらんべのまなこそし、河津の三郎に似たるものかな。ま
ことやこの御山に、伊東が孫のありと聞けば、もしこれにて

むげ

冥加

まぼる

やあるらんと、目を放さずまぼりければ、さうなく寄らざり
けり。祐經猶よくく見れば、まなこの見返し、顔だましひ、少
しも違ふ所なし。祐經は念咒果て、後、大衆の中へ立入つて
「伊東入道の孫此の御山に候と聞く。いづくの坊に候ぞや。名
をば何と申すぞ。」と問ひければ、或僧申すやう、御名をば箱王
殿と申して、別當坊にまし候。「此の頃は里に候か。これに
候か。」と問ひければ、これにこそ。とて、東西を見めぐらし、長絹
の直垂に、松に藤を縫うて、萌黄の絲にて菊綴して、こなた向
に立ち給ふこそ。と教へけり。さればこそと思ひ、もとの座に
歸り、箱王を招きければ、願ふ所と喜びて、祐經が膝近く寄添
ひけり。左の手にて箱王が肩を押へ、右の手にては髪を搔撫
でて、あつばれ父に似給ふものかな。今まで見奉らざること

の本意なさよ。吾殿は河津殿の子息と聞くは眞か。兄は男になり給ふか。曾我の太郎はいとほしくあたりたてまつるか。知らざるものの、馴々しくかやうに申すとばし思ひ給ふな。御分の父河津殿とは従弟なり。殿原にも親しき者とは祐經ばかりなり。見奉れば昔の思ひ出でられて、今更あはれに存ずるぞ。急ぎ法師になり、別當につき給へ。弟子多しといふとも、祐經程のかたうど持ちたる人あらじ。便宜をもつて上様へもよき様に申し、寺門の訴訟あらば申し達すべし。今より後はいかなる大事なりとも、心おかず仰せられよ、叶へ奉るべし。吾殿の兄にもかやうに申すと傳へ給へ。父にも添はで、いかに便なくましますらん。行賸、乗馬などの用の時は承るべし。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪

ひ給へ。誠や古き語に、貴きは賤しきが嫉み、智者をば愚人が憎む。罪障は千載に消えず、報は千劫に絶えずと申し傳へたり。さても見參の初に、折節引出物こそなけれ。又虚しからも、無念なり。これをとて、懷より赤木の柄に銅金入つたる刀一腰取出し、箱王にこそ取らせけれ。何となく受取れども、箱王は涙に咽びけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、目を放さず、其の上大の男の、常に肩に手を置きければ、なまじひなる事をし、いだし、こがひを取られ、人に笑はれじと思ひとどまりぬ。唯言ふ事とては、「さん候」とばかりなり。卒爾の見參こそ所存の外なれ。さりながら喜び入り存候。里下りの序には、吾殿の兄十郎殿と連れて來り候へ。返す」といひ、立ちにけり。箱王力に及ばずとゞまりぬ。

—曾我物語—

卒爾

一七 舟ふな

どの「罷り出でたるは此のあたりの者でござる。此のぢう何方へも慰みに參らぬ。今日は何方ぞへ遊山に出でうと存ずる。冠者を喚出し申しつけませう。あるかやい。冠者は。この誰かある。冠者「御前に。この念なう早かつた。汝を喚出すは餘の儀でない。今日は遊山に出でうと思ふが、何とあらう。冠者「内々は御意なうても申し上げると存ずる處に、一段でござりませう。この「されば、西山、東山は常例の事ぢや。何處ぞ様子の違うた處へ行きたい。冠者「されば、何處がようござりませう。あゝ思ひつきましてござりまする。西の宮へ參らしやれませい。この「これは一段の所であらうほどに、供の用意をつかまつれ。

(一)攝津國武庫郡。四宮神社あり。

念なう
何とあらう
一段

うい奴

冠者「最早用意致してござりまする。この「一段うい奴ぢや。來い來い。して西の宮といふ處は面白い處か。冠者「いやはや、浦山を抱へまして、上り下りの船などを眺め、殊の外景の多い所でござりまする。この「こりや面白からう。やい、此處にかい川がある。冠者「これは殿様御存じござりませぬか。この「いや知らぬ。冠者「これは神崎(二)の渡と申すは、これでござりまする。この「これは徒歩渡りにはなるまいが、渡守はないか。冠者「いやござりまする。この「あらば急いで呼べ。冠者「畏つてござる。や、いつも此處に居るが、は、上に見ゆる。ほうい、ふなや。この「やい其處な者、渡ならば何故にふねというて呼ばぬ。冠者「いや、殿様のお合點の參ることではござらぬふなやあ。この「や、さやうに呼うだ分では來まいぞ。ふねというて

(一)攝津國河邊郡。神崎川の邊。

呼べ。冠者「いや、殿様に申し上げたい事がござる彼方の着場と、此方の着場を何と申しますぞ。そのそれな、ふねつきといふは。冠者「さやうござるによつて、御合點が參らぬこととござる。ふなつきなどは申せ。ふねつきと申す事はござるまい。それにつきまして、ふななどは古歌にもござれ。ふねと申す古歌はござりますまい。そのいらぬ汝の古歌だてではあるまいか。さりながらあらば申せ。冠者「畏つてござる。ふなでしてあとはいつしか遠ざかる、須磨の上野に秋風ぞ吹く。』と申す時には、ふなではござりますまいか。その「やい其處な奴、汝が方になれば、某が方にもある。』ほのくと明石の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思ふ。』とあれば、おのれふねではあるまいか。冠者「いや、此方にはまだござりまする。

古歌だて

〔源氏物語玉鬘の巻に出づ。〕

心得た

〔一〕柿本人麿のこ
と。此の歌實
は小野篁の詠
なれど、俗に
人麿作と傳へ
たり。
〔二〕平安朝の歌
人。攝津菟原
郡の人。
〔三〕萬葉集卷二十
に出づ。

その「あらばよめ。冠者「ふな人も誰をこふとか大島の、うら悲しげに聲の聞ゆる。』と申す時は、ふなではござりますまいか。その「やい其處な奴、まだ此方にはある。冠者「あらばよまつしやれませい。その「さりながら、これはちと早うよまねばならぬ。冠者「早うなりとも、遅うなりともよませられい。その「心得た。』ほのくと明石の浦の朝霧に、島がくれゆくふねをしぞ思ふ。』冠者「申し殿様、いやそれは最前のお歌でござりまする。その「最前のは人丸のあそばした歌、只今のは猿丸大夫の早歌ぢや。冠者「いや申し殿様、まだ此方にはござりまする。その「も、おじやるまいがの。冠者「いや、ござりまする。その「あらばよめ。冠者「ふななきほふ堀江の川のみなきはに、きゐつゝ鳴くは都鳥かも。』と申す時は、ふなではござりますまいか。その「それ

はふねぎほふであらうがな 冠者いや、殿様の古歌を直さつしやれませうことなりにくうござりませう そのそれに待ち居ろ。冠者殿のはやつまらせたと見えまして。 そのやれ扱いらぬ冠者と古歌だてを申して、殊の外迷惑を致すことにござるや、思ひついた事がござるやい冠者、汝が方にふなといふ古歌が數多なれば、某が方にはふねといふことを謠にまで作つておかつしやれた。冠者、ござりませうば、唱はしやれませい。 その『山田やばせの渡船の夜は通ふ人なくとも、月の誘は、おのづから、ふねもこがれいづらん。こがれ出づらん。』とはないか。冠者、申し殿様、 その何ぢや。冠者、その末は、ふな人もこがれ出づらん。』とはござりませぬか。 その何でもないこと。退り居ろ。え、冠者は、

(一) 謡曲「三井寺」の句。

何でもない

— 狂言記 —

(一) 崇徳上皇。
(二) 左大臣藤原賴長。保元元年(一一八二)敗死す。年三十七。

(三) 頼朝の父。保元元年敗れて殺さる。年六十二。

(四) 頼朝の父。平治元年(一一八二)中家を討さんと謀り敗死す。年三十八。
(五) 爲義の第八子。保元の亂に捕へられて伊豆大島に流され嘉應二年(一一八三)自殺。年三十二。

一八 鎮西八郎 其の一

新院^(一)は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府^(二)は車にて参り給ふ。白河殿より北河原より東、春日の末に在りければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東西に門二つあり東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、並びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。其の勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝^(三)に附きて、多分は内裏へ参りけり。

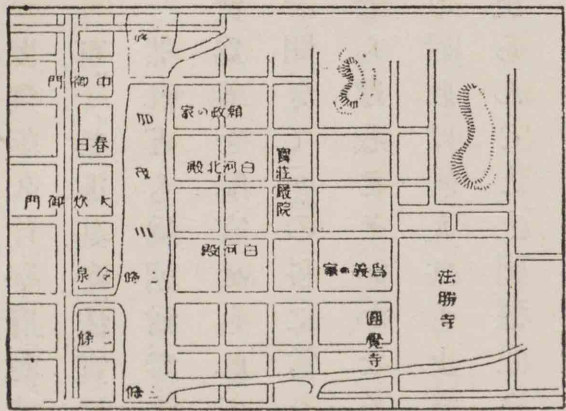
こゝに鎮西八郎爲朝は、我は親にも連れまじ、兄にも具すまじ。高名、不覺も紛れぬやうに、只一人いかにも強からん方

へ差向け給へ。縦令千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。とぞ申しける。よつて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。其の勢百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つき早の手利なり。弓手の肘馬手に四寸延びて、矢束を引くこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、旁若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなんとて父不孝して、十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の阿曾平四郎忠景が子に、三郎忠國が婿に成つて、君

矢つき早
不敵
旁若無人
不孝す

よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へんと



(一)筑前の國糟屋郡香椎村の神功皇后を祀る。

三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使におし成つて、悪行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す

間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中納言公能卿を
上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

忽諸

源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、臬惡頻聞、狼藉尤甚、早
可令禁進、其身依宣旨執達如件。

參洛

然れども爲朝猶參洛せざりければ、同じき二年四月三日、
父爲義を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これ
を聞きて、親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。其の儀
ならば我こそいかなる罪科にも行はれんずれ。とて、急ぎ上
りければ、國人共も上洛すべき由申しけるに、大勢にて罷り
上らんこと、上聞穩便ならず。とて、形の如くに附従ふ兵ばかり
召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥
して、今度の御大事に召具しけるなり。

解官

一九 鎮西八郎 其の二

爲朝は七尺ばかりなる男の目角二つ切れたるが、紺地に
色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧
を似せて、白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧、同じき獅子
の金物打つたるを着るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の
尻鞆入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて、鉞打つたるに、三十
六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出で
たる體、樊噲もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも
劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しとする所を
得、弓は養由をも耻ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れず
といふことなし。上皇を始めまゐらせて、あらゆる人々、音に

(一)漢の高祖の臣、智謀あり、高祖を援けて、遂に偉業を成さしむ。
(二)共に有名な兵法家。
(三)支那周代の弓術家。百歩距離、百發百中なりといふ。

聞ゆる爲朝見んとて舉り給ふ。

左府乃ち合戦の趣計らひ申せ。と宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大の合戦數を知らず。中にもせつかくの合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得ること夜討に如く事候はず。然れば只今高松(一)殿に押寄せ三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくくも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして清盛などがへろく矢、何程の事か候べき。鎧の袖にて拂ひ蹴ちらして捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙

(一)假内裏。後白河天皇の御所。

心にくし

へろく矢

駕輿丁

掌を反す如し

つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨て、逃去り候はんずらん。其の時爲朝参り向ひ、行幸を此の御所へ成し奉り、君を御位に即け参らせん事、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ参らせんこと、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。と、憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申す様、以つての外、荒儀なり。年の若きが致す所か夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎二十騎の私事なり。さすが主上上皇の御國争に、源平數を盡して、両方に在つて勝負を決せんに、むげに然るべからず。其の上南都の衆徒を召さるゝことあり、興福寺の信實、玄實等、吉野十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者共を召具して、千餘騎にて参るが、今夜は

むげに

(一) 頼長の父忠實。

宇治に着き、富家殿(一)の見參に入り、曉こゝへ參るべし。彼等待調へて合戦をば致すべし。又明日院司の公卿殿上人を催さん。に、參らざる者共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること両三人に及ばし、殘はなか參らざるべき。と仰せられければ、爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちて、咄きけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候はん。明日までも延びばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戦ふともいかで利あらん。敵勝つに乗る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しきことかな。とぞ申しける。

先蹤

二〇 白河殿夜討

(一) 頼長。

白河殿には、かくとも知るしめさゞりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏の様見て參れ。と仰せければ、親久乃ち馳歸り、官軍既に寄せ候。と申しも果てぬに、先陣既に馳來る。其の時鎮西八郎申しけるは、爲朝が千度申しつるは、こゝ候く。と忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ません爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、是は何といふ事ぞ。敵既に寄せ來たるに、方々の手分をこそせられんずれ、只今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん、唯もとの鎮西八郎にて候はん。とぞ申しける。

除目

物騒

合はぬ敵

(一)桓武天皇。柏原陵に葬り、因つて柏原天皇といふ。
(二)源經基の事。清和天皇第六の皇子貞純親王の長子。故にいふ。
(三)源義家。

安藝守清盛は三條を河原へ打出で、筋違に東河原に打渡り、堤を上りに、北へ向つてぞ歩ませける。其の勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押寄せたり。こゝを固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六。とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。とぞ宣ひける。

景綱、昔より源平兩家天下の武將として、遠勅の輩を討つに、兩家の郎等大將を射ること互に之あり。同じ郎等ながら、

下藤

裏かく

公家にも知られ進らせたる身なり。下藤の射る矢立つか立たぬか御覽せよ。とて、よつ引いて射たれども、爲朝之を事もせず、合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しきに、矢一つ賜はらん、受けて見よ。且は今生の面目、又は後生の思出にもせよ。とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以てはいたるに、七寸五分の丸根の筥中過ぎて、筥代のあるを打食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢庭に落ちて死にたりけり。

伊藤五此の矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。と申せば、安藝守を始めて、此の矢を見る兵ども、皆

舌を振ふ

(清原武則)

舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、君の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふ事なし。抑君の御弓勢を慥かに拜み奉らばや。と望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより彌、兵ども歸服しけりと申し傳へて聞けば、かりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るにや、あな怖ろし。とぞおぢあへる。

かく口々にいはれて、大將宣ひけるは、必ず清盛が此の門を承つて向ひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。とあれば、兵皆「それも此の門近く候へば、もし同じ人や固めて候らん。唯北

有るべうもなし

の門へ向はせ給へ。といへば、さも言はれたり。今は程なく夜も明けなんぞ。されば小勢に大勢駈立てられんも見苦しかりなん。とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉緘の鎧に、白星の兜を着、二十四差いたる中黒の矢負ひ、二所藤の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、勅命を蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返すやうやあるべき。續けや若者ども。とて、駈出でられけるを、清盛これを見て、有るべうもなし。あれ制せよ者ども。爲朝が弓勢は目に見えたることぞかし。過すな。と宣ひければ、兵ども前に馳塞がりけるに力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

爰に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行とい

剛の者

ふは又なき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引給ふを見て、さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引く事やある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても、度々多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかゝぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせん。とて駈出づれば、をこの高名はせぬに如かず。無益なり。と同僚ども制すれども、元よりいひつる言葉を返さぬ男にて、夜明けて後に傍輩の、『いで八郎の矢目見ん。』といはんには、何とか其の時答ふべき。されば日頃の高名も失せなん事の無念なれば、よし／＼人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。とて、下人一人相具して、黒革緘の鎧に、同じ毛の五枚兜を猪頸に着

猪頸に着

十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。

門前に馬を駈据ゑ、もの其のものにはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊、強盜を搦め取る事は數を知らず、合戦の場にも度々に及んで、高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。と申しければ、爲朝、一定きやつは引設けてぞいふらん。一の矢をば射させんず。二の矢を番はん所を射落さんず。と宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、駈出でて、鎮西八郎是に在り。と名のり給ふ所を、本より引設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひざまに

一定

縫ひざま

ぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふる所を、爲朝よつ引いてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺を尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれて、溜るやうにぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆様に落ちけるに、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳寄り、主を肩に引懸けて、味方の陣へぞ歸りける。寄手の兵之を見て、愈此の門へ向ふ者こそ無かりけれ。——保元物語——

二一 東大寺

薄田 泣菫

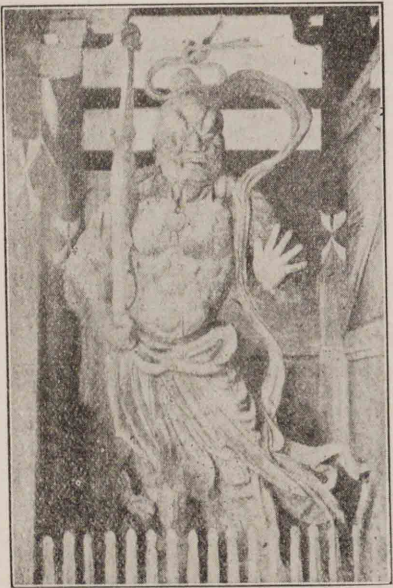
(一) 華嚴宗の大本山。奈良市にあり。創建。聖武天皇の御宇に、大佛殿は即ち其

月がよいので、東大寺(一)のあたりへ出かける。すく〜と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷うてゐる。此のやうな宵に、木立の下路で

いつかな

迷ひでもするものならば、きつと鬼の落したまじもの係か蹄せにかかつて、夜一夜歩き廻つたところで、いつかな路標を見つけることも出来なからうと思はれる。

南大門は撞木杖をつ



密迹力士像

いた翁のやうに、支柱に凭れて、其の立派な體をぢつと空に擡げて居る。密迹、金剛二力士は、此の

寶杵

肉むら

に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月明が、盗むやうに窓に零れて、肩から脹脛ふくろひざにかけて、半身に流れる肉むらの色がいか

居丈高

も冷たく、又美しい。ぢつと見てみると儼しい顔のどこやらに追懐の「夢心地」が漂うて、靜かにと息をつくかのやうに思はれる。併しそれも一瞬の間で、再び寶杵を揮うて教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

燈明瞬く

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも届かうといふ長い廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもあることか、どこやらに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはまたもとの靜寂にかへる。天人の足音も聞えさうな宵である。此のやうな靜かな夜をぢつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。^(一)永祿の昔

^(一)永祿十年松永久秀の兵火に罹る。

^(一)添上郡佐保村。

^(二)生駒郡平城村の古名。

法界
閻浮の世



金剛力士像

佛殿が炎上してから後百三十餘の夏冬を、佛はいつも露宿でいらせられたといふ。其の頃は夢のやうな月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず、十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れるながし目のやうな月明に濡れながら、又は佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、^(二)秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれ程美しく、また偉大なものであつたか。今宵それらの追懐に、

しみととと寂寞の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。
あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵
は、もう夜半過の心持がする。

二二 十訓抄

一 都良香

(一)儒者。初名官道。文章博士。元慶三年(一五三九)歿。年三十六。
(二)琵琶湖の北部に在り。

(三)平安京の正南門。

(四)菅原道真。自讃

都良香竹生島に参りけるに、眺望心にすみて、三千世界眼前盡。といふ句を作りて、其の末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、十二因縁心裏空。と、一句くはへ給ひけり。

同じ人羅城門を過ぐとて、氣霽風梳新柳髮。と詠じたりければ、樓上に聲ありて、氷消浪洗舊苔鬚。とつけたりけり。良香菅丞相の御前にて、此の詩を自讃し申しければ、下の句は鬼

の詞なり。とぞ仰せられける。

二 能因法師

能因入道伊豫守實綱に伴なひて彼の國に下りけるに、夏の日ひさしく照りて、民の歎あさからざりけり。神は和歌にめで給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を國司類にすゝめければ、

天の川苗代水にせきくたせ

あまくだります神ならば神

みてぐら
と詠みて、みてぐらに書きて社司して申し上げさせければ、炎旱の天俄に曇り渡りて、大いなる雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべて緑にかへりにけり。忽ちに天災を和ぐる(三)こと、唐の貞觀のみかどの蝗を吞めりし政にも劣らざりけり。

(一)歌僧。後鳥羽天皇頃の人。

(二)三島神社。伊豫國宇摩郡三島町にあり。

(三)唐の太宗のこ。貞觀は太宗の年號。

能因は至れるすき者なり。

都をば霞とともに立ちしかど

あきかぜぞふく白河の關

念なし

と詠めりけるを、都にありながら此の歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色を黒く日にあぶりなして後、みちのくの方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しける。

三 松葉仙人

(一)河内國南河内郡天野村。行基の開基。

河内國(一)金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦みなし。よく食ひおほせつれば、仙人とも成りて飛びありく。といふ人有りけるを聞きて、松の葉を好き食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食

ひのきて、やうく、兩三年に成りにけるに、げにも身も軽くなる心地しければ、弟子共にも、我は仙人になりなんとするなり。と常はいひて、今々とて、内々にて身を飛びならひなどしけり。すでに飛びあがりなるといひて、坊も何も弟子共に分ち譲りて、上りなば仙衣を着るべし。とて、かたの如く、腰に物をひとへ巻きて立出づるに、我が身に是より外はいるべき物なし。とて、年比秘藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に附けて、すでに出でにけり。

弟子、同朋、名残を惜しみて悲しび、聞及ぶ人遠近市のごとくに集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、此の僧片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ昇りなんと思へども、まづ近く遊びて、事の様人々に見せ奉ら

そば

やうあらん
どかくして

ん。とて、彼の巖の上より、下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん。といひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五尺ばかり有りけるに、さかさまに飛ぶ。人々目をすまし、哀れをうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うきくとして弱りにければ、飛びはづして谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、これ程の事なればやうあらん。定めて飛びあがらんずらん。と見る程に、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、只死にに死ぬれば、弟子、眷屬騒ぎ寄りて、いかに。といへば、いらへもせず、纔かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入れつ。爰に集れる人笑ひの、しりて歸りけり。さて此の僧、あるにも有らぬやうにて、痛み臥せり。とかくいふばか

たかい
たり
まり居

りなくて、弟子も耻づかしながらあつかふあひだ、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじく食ひのこしつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、命ばかりは生くれども、足手、腰も打折りて起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、本の如く五穀貪り食ひて、弟子共にゆゝしく譲りたりし坊も室も取返して、かゝまり居たり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。

— 十訓抄 —

流露

二三 文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、其の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉

(一)曹操「短歌行」に「月明星希、烏鵲南飛。」

(二)Frederick the Great (四曆一七一六—一七八六)

(三)Sans Souci 伯林の近郊ボツダムに在り。

景慕

(四)「登〇べき便なき身は水の下ひに世を渡るかな」

人は、一入懐かしい心持がする。魏の曹操は其の事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、月明らかに星希に、と歌つた一事を想ひ出すと、何と無く慕はしくなつて来る。普魯西のフレデリック大王は賢君として名高いが、其のサン・スシー宮中に佛國の文豪と交つて、文學に耽られた事を考へると、尙更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみと、と身に染みて、景慕の念を生ずる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな。と詠んだ風流、衣川に矢を番つて、衣のたてはほころびにけり。と呼止めた情致がある爲で、これは其の後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出来ぬところ。源三位頼政の「しみを拾

(一)「時鳥名をも雲井にあぐるかな」弓張月のいるに任せ
(二)「埋木の花さくこともなかりしにのみ」哀なるは、ぞ世に
(三)「とても世に」ながらふべくもあらぬ身
(四)「結ばん」の「かりのちてぎりをいかで
(五)「歸らじとかねて思へば梓弓なき數とに
(六)「有明の月もあかしの浦風にあし波ばかりこよると見
(七)「陸奥のいはえしか」
(八)「ぞ知らぬはえみ」
(九)「ぞ知らぬはえみ」
(十)「ぞ知らぬはえみ」

曩祖

ひて世を渡るかな。は餘り感心せぬが、弓張月のいるに任せて。埋木の花さくことも無かりしに。などの韻事があつた爲に、後世にまで其の名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、かりの契をいかで結ばん。の歌と、梓弓無き數にいる。の辭世とである。平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか。の風流があつて、眇の俄殿上人も優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶ所では無い。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。を思へば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚が交つて居たらうと想像される。

其の子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大の發

達を遂げて居る。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で、風流譚のあるのは、非常に其の人品を高くするもので、時には其の人の闕點まで掩ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜が無くてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏、北條氏、長曾我部氏等の家訓は皆之を歌つて居る。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人が

(一)「霜滿軍營」
秋氣清。數行
過雁月三更。
越山併得能州
景。遮莫家鄉
憶「遠征」。

想望す

隨分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人が無かつたなどといふのは、ほんたうの武士の無かつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流の人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をもつて居る。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は、人をしてまづ之に同情せしめる所以で、其の襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。其の家來の直江兼續も、文學の素養から其の風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何と無く物足らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍其の憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢」、橋本景岳の「始知松柏後凋心」、頼三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、其の心事は永く其の文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。是等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。其の志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。併し

披瀝す

日本では文學の他の方面は從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりする事は無かつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心掛けるがよい。否々平生から文學に心掛ける程の襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

二四 平重盛論

高山林次郎

小松の内府重盛はげに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば、彼は平家第一等の人物といふべかりき。唯理に明らかなるに較ぶれば、其の意は寧ろ弱く、其の情は寧ろ脆

此の人に
りて此の弊あ

樞軸
柱石

戰陣に臨み
ては危きを
矢石の間に
救ひ帷幄に
參しては籌
を百里の外
に運らす

かりき。彼が其の材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少くとも更に數層の強烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して、現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か闕くるところあるを免れず。此の人に於て此の弊あり、洵に惜しむべし。

四十三年の齡は重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや、彼實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實に其の柱石たり。彼の一生は其の父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に、情強く、眞に一世の豪傑なりしかど、其の事をなすに當りて、重盛に待たざること殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀

名鑒



平重盛

禮彼に於て備り、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は啻に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑒たり、

君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし吾が重盛は實に唯一の人傑なりき。惡源太義平と紫宸殿の階前に闘ひし重盛は、如何に勇ましかりしよ。彼武藝に於て人後に落つるものに非ざりき。信賴平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛をはじめ平家の一族は、寧ろ西國に走りて再舉を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸ら

提唱

ざりせば、天下の事は、知るべきのみ。此の時に當りて、衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を鼓舞したるは、實に重盛なりき。されば平治の戦功を論ずれば、當に功一級たるべきもの實に重盛なり。唯此の一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乗じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

蛟龍雲に乗す

開山

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益、其の高きを加へぬ。彼今や一武人にあらずして、朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨(一)ずべきもの、實に彼を措きて其の人無かりき。其の男資盛(一)關白の儀仗を冒して辱められし時、入道は大いに怒りて暴

(一)藤原基房。

(一)今の京都市鹿谷町。俊寛、成親、康頼等此に會合して平氏討滅を謀る。

四恩の妙理

慢の復讐を試みしが、重盛は却つて慚愧し、資盛を放つて世に謝しけり。鹿谷(一)の事ありて、成親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを説破せしも、重盛なりき。事延いて法皇幽閉の舉あらんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしも、亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度か之がために沮まれて、君國の事ために纔かに安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは、察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大極みなかりしが、其の裏面には其の愛子を犠牲とせる慘愴たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛説に歸依して來世を希求せしもの、其の際遇の自ら然

忠孝兩全

恨事

らしめしところ、其の情や深く憐むべしとせん。
 然れども此の佛説に歸依せる事は、重盛にとりては寧ろ
 恨事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉
 公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後
 已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすが
 に絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後必ずしも辨じ
 難からず。何ぞ妄に一身の安慰を冥々の後にのみ求むべし
 とせん。此の難關にあたりて能く功を擧ぐるもの、眞に人傑
 といふべきなり。重盛たるもの、輕々しく事局を回避して、自
 ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要
 は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せ
 ざらんと謂ふにあり。何ぞ其の願の私情に拘ることの多く

云爲

儀表
 悍馬の御に
 離れしが如

して、公義に盡すことの少きや。彼の一身は公私内外の望の
 由つて繋るところ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、
 洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば入道が暴横はさ
 ながら悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべき
 なり。彼死せば一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事
 あらん日、誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知
 るべきなり。重盛已に一身を以て此の大局を保持し、居然と
 して其の重きに任ず。何ぞ區々の私情のために逃避すべけ
 んや。重盛其の希世の聰明を以てして、如何ぞかばかりの理
 義を辨ぜざらん。辨じてなほ之を敢へてせざるものは、其の
 佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。これ
 重盛にとりて一大恨事に非ずして何ぞ。

龜鑑

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざるところなり。其の情や誠に憐むべし。其の行や即ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、自ら求めて其の家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も、齡已に耳順を越ゆ。其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲すなきこと、重盛の明を待つて始めて知る所にあらざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり。院宣一たび下らば、天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺の頼朝に説ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ、心も剛に、謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に窮れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて塵かば、天下靡然として従はん」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、亦以て想ふべきにあらずや。あはれ世は如何にもなりなん。唯力を盡し、忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身のせん術なからめや。ざるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて、遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。

（一）俗稱遠藤盛遠。事により伊豆に流され、頼朝を見つて平氏討滅を勧む。

耳順

ろぞ。御邊一たび起つて塵かば、天下靡然として従はん」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと、亦以て想ふべきにあらずや。あはれ世は如何にもなりなん。唯力を盡し、忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身のせん術なからめや。ざるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて、遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。

— 樽牛全集 —

二五 土の匂

長塚 節

春は空からも、土からも微かに動く。毎日のやうに、西から埃を卷いて来るはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふはくして綿のやうな白い雲が、ほつかりと暖い日

はやて
空際

蟄居

光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、ちつと動かずに居ることがある。水に近い濕つた土が、暖い日光を念ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせる。と田圃の榛の木のおみな蕾は目に立たぬ間に少しづつ延びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでもこつちでも、くくくくと鳴き出すことがある。空から射す日の光は、そろそろと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止まない。土はすべてを段々と刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、其の他の草が空と相映じてすつきりと其の首を擡げる。軟さに満たされた空気を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらくと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らし

て居る。蛙は假死の状態から離れて、軟な草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて、其の長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、只空にのみ響いて快げである。

彼等は更に、春の到つたことを一切の生物に向つて促す草や木が心づいて、其の活力を存分に發揮するのを見ない。うちは、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨て、自分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる黄色味を含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらうて居る周囲の林を見る。岬のやうな形に偃うて居る水田を抱へて、周囲の林は漸く其の

本性

可憐

硬直

空間

本性のまに／＼、勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雑木林のそこらこゝらに散在して居る開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞しさうに葉の間から、こつそり四方を覗く。雑木林の間には、また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて、「春がふけた。」と呼びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配して居るべき筈だと思つて居る蛙は、其の囀る聲を押し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたたるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまは

爪立す

ゆさに堪へぬやうに、其の身を遙かに煌めく日の光の中に没して、其の小さな喉のちぎれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴きほこつて、櫛の木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。

此の時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に附いて居たすべての雑草が爪立して、只空へ／＼と暖な光を求めて止まぬ。土がそれをちつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、めい／＼に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思

聲を呑む

ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴きたてる。白い絨絲のやうな雨は、水が田に満つるまでは注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し、働いて居る人々の、周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かさせ動かせと促して止まぬ。蛙がひつたりと聲を呑む時には、日中の暖さに人もぐつたりと成つて、田圃の短い草にごろりと横に成る。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙は如何に自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳を擦つて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆短い時間に

肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は、遠く遙かに響けと鳴く其の聲にゆられつゝ、夜の間には生長する。櫟や、楡や、其の他の雜木は、蛙が鳴けば鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節まではいくらでも繁茂することを繼續しようとする。そこには、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

—土—

心づから

つとめて

四つの始

あらはなり
はだれ

二六 春の樂み 其の一

貝原益軒

春はまづ一夜の程に、あらたまの年立返る朝の空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて貧しき家にも春盤などいふものを設く。又土器取出で、大御酒進めて、まづつとめて父母に壽し、次に自ら祝し、賓客にももてなす様など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。時は今四つの始なれば、空の氣色やうく、ひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山に霞の薄くたな引ける、様々に物けざやかに見えて、冬の空に立變れる装、まづ春の來れるしるしあらはなり、垣根隠れに冬より残れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の匂百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷

なづさふ

(一) 韓愈のこと。
唐の文豪、字は退之。文公は諡。長慶四年(四曆八二七)歿。年五十七。

(二) 清少納言。
(三) 日の光敷し
わかねば石の上ふりにし里に花も咲きけり。(古今集、布留今道)

る鶯の春を迎へても、若き聲、初春の初音のけふに逢へる。耳とまりて戀しく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むは是まづ春の賜なり。これを始として、猶行くさき遙かに榮ゆる春の豊なる惠たのもし。千年を経べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見なれしもいや珍しくなづさはれぬ韓文公が「最是一年春好處」といへりしは、早春のけしき、一年の内にて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。

如月の程より、よろず皆冬の心盡きて、空の色麗に氣色だちて、四方山も霞こめたるよそほひ、殊に曙のけしき譬ふべきものなくあはれむべし。古の人「春は曙」といひけんもうべなるかな。日の光敷し分かねば、數ならぬ垣根の内も、冬にかはりて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花まち顔になご

けはひ
日永くして
少年の如し

(一) 周代の哲學者
莊子。孟子と
同時代。
(二) 唐の詩人
杜甫。杜牧に對
して老杜と稱
せらる。大曆
五年(西曆七
五〇)歿。年七
十九。

老いみいは
けみ

やかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行け
ば、人の業も古年より暇ありて忙しからず。日永くして少年
の如く心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに霞
み渡りたる景色いと遙けし。夕づけて日は既に入りぬれど、
残れる日影猶久しきは、日の永きしるしなるべし。此の頃は
陽氣ののほる氣にや、子ども紙鳶といふもの造り、長き絲つ
け、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたな引く
を戯とすれば、老いみ、いはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野に
はまた、絲遊といふもの霞の如く地より立騰れり。又かげろ
ふともいふ、^(一)莊周は之を野馬といふ。^(二)老杜が詩に「落花遊絲白
日靜」といへるもこれならし。これ皆常には無きものなるが、
春めきていとめづらし。又垣根の草早く萌出づるを見るに

けぢめ

消えがて

けおさる

益影



貝原益軒

立つ心地す。李白きは消えがての雪
の梢に残れるかと見えて、いとうる
はし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心は
無けれど、人の心を動かしてえなら

ぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも第一
の見物なれば、梅散りて後、此の頃の異花はみなけおされぬ。
されど日比待たせく、てやうく、咲けるが、飽くまで見る
程もなく疾く散るは又恨めし。

(一) 檀古今集、藤原爲家。

しうしろめた

よしさらば散るまでは見し山櫻
花のさかりを面かけにして
と古人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情ふかし。此のをりから、春雨のしきく降れば、我が宿の園の櫻はいかにかあるらんとうしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を畫がき出せるはいとうるはしき眺なり。

二七 春の樂み 其の二

春やうやく深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を争ひ、群花艶を競ふ折なれば、何れの處か春の無からんや、斯る景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれ歩き、ひねもす花をながめ暮すこそ、目を

(一) 宋の人。名は博。希夷は其の號。太祖に仕ふ。

(二) 歌管樓臺人寂。寂。徹。院。落。夜。沈。沈。蘇。東。坡。蘇。句。林。希。逸。の。詩。

恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中なる其の一つなるべし。我が心の樂みを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきも此の折なり。杜甫が詩に、鶯の聲暖にして正にしげし。といひ、陳希夷が、野花啼鳥一般春。と詠ぜしも、皆此の時なり。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂み、春宵一刻直千金。花有清香月有陰。といふ詩を思ひ出でられぬ。又、惜花朝起早。愛月夜眠遲。といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くるこ

(一)周頌の詩句。
(二)白居易の詩句。
(三)謝靈運が夢中に得たりといふ詩句。

(四)山城國綴喜郡。山吹の名所。

めかれせずながめがちなり
つらくに
(五)巨勢山のつらつらに、見れどもあかず巨勢の春野を、(蘇集、阪門人足)いごましく

とおそきは、花を惜しまざるなり。此の頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば、春風入焼痕(一)といひ、又野火烧不盡。春風吹又生。といへるも、焼野の草を詠ぜしなり。古詩に、池塘春草生(二)といへりしは、此の頃の眼前の景色を唯ありのまゝにいへるなるべし。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、井手の渡も見
る心地して賑はしければ、めかれせずながめがちなり。春の
花の多かる中に、只山茶のみ異花にかはりて盛久し。殊更つ
らをなして植ゑたるつらく(三)椿、つらくに見れども飽か
ず。階のものと、薔薇も夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどま
しく、遅く疾く咲きつゞき、酴醪(四)に至りて、花のこと終りぬる

(一)「惜しめども春の限りの今日、日のさへなり暮にさへなりけるかな。」
(二)後撰集、霞人不知。
(三)宋の文豪蘇軾は東坡。蘇軾は其の初字。徽宗の初年(西暦一一一六)歿。年十六。

は、名残惜しと見ゆ。春の花はいづれとなく、咲出づる色ごとに、目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨も亦しげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあへぬ春の限りのけふの日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」といへる、うべなるかな。

——樂訓——

二八 日本人と自然美

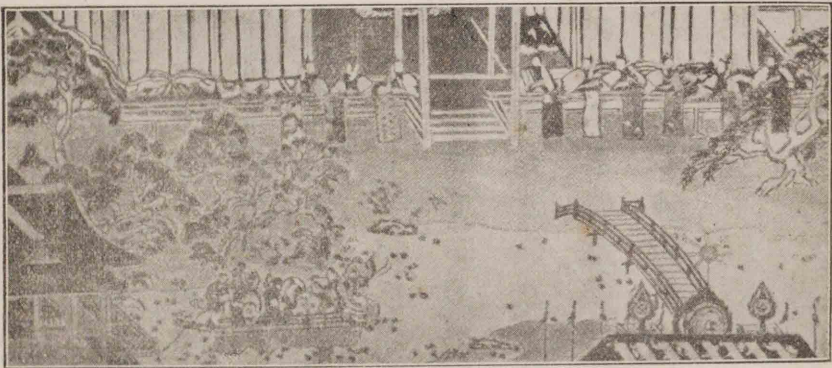
世界の各民族中、日本人ほど自然美を愛し、自然美を楽しむ者は無い。家屋、庭園の造築から首めて、一切の器具、服飾、一つとして材を自然美に採らぬものは無い。日本へ漫遊する

縮圖 輪郭 背景

外國人は、まづ街上に遊んで居る女の子の美しい染模様の着物に驚き、次に博物館に入つては、刀劍、甲冑、古來軍人の用ひた一切の武器が、風流な花鳥を以つて飾られてゐるのに感心する。仔細に觀察すれば、觀察する程、自然美に對する嗜好が、如何なる微細な點にまでも行渡つて居るのを歎賞する。紅葉形の煎餅、黄菊を象どつた蒸菓子、之を盛る器はもとより、之を薦むる部屋の欄間、襖、床の間の掛物、生花、何を見ても、外界美を縮圖したもので無いのは無い。日光の東照宮を見物しては、其の建築彫刻の美に驚くよりも、其の輪郭、其の色彩が、如何に其の美しい背景と調和を保つて居るかを驚歎するのである。

日本人は自然の形を保存して、しかも一層之を美化して、

静物



(詞繪幸行競駒)圖庭の代時朝安平

自然物を愛賞する。生花の術に於ては、花卉自然の枝ぶり、幹ぶりを、自然よりも一層美化して示す。盆栽も同様である。箱庭、盆栽の配置は自然の風光よりも其の趣が更に多い。自然界の縮圖で、しかも自然美を構成せる急所、中心點を、巧に捕捉し得るのである。日本の繪畫が、花鳥、山水にすぎれて居るのは、いふまでもない。西洋畫題の静物などと日本の花鳥畫とは著しく違ふ。

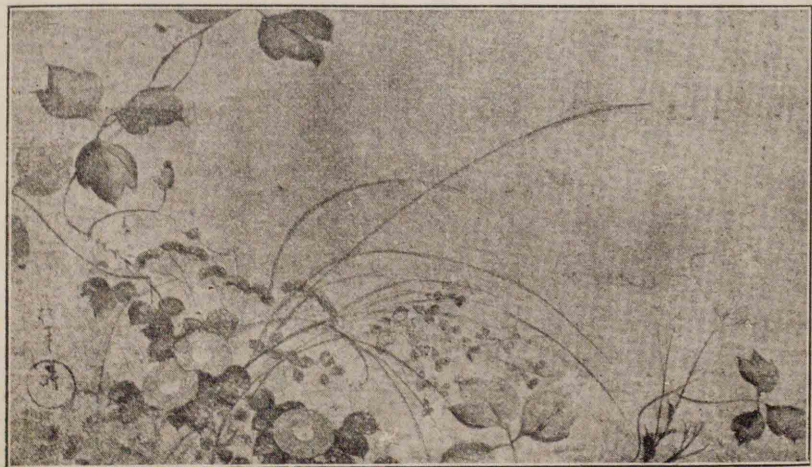
日本の文學は、自然美を歌ふ事が

心理上

其の生命である。古代の和歌から近世の俳句まで、概ね自然美を歌つた歎賞の聲である。自然美を愛するの極は、人事を以てすべて自然美と結合せしめてしまつた。喜怒哀樂、すべて吾人の心理上の状態は、皆自然美をいひあらはす語句を譬喩的に用ひて居るのである。百合花の榮ゆる。「と言ひ、夏草のまどふ。「といひ、思の煙。「といひ、花の心。「といひ、涙の露。「といひ、「袖の時雨。「といふ、皆それである。單に春雨といひ、菜の花といひ、萩の花といひ、木枯といつても、日本人の心の中には、直ちにそれと聯想する幾多の人事が浮ぶのである。自然と人事とは全く融和して、一つになつて居るのである。吾人の日常往復する手紙の文にすら、まづ時候の挨拶やら、四季の推移などを冒頭に置くのである。

推移

一年四季の推移が如何に日本人の享樂を助けたか、如何に其の注意を惹いたかといふ事は、春秋の争が、古來未決の一問題であるのを見ても分る。霞がくれに百花のとどりに、咲匂ふ春が良いか、秋霧を分けて、淡き濃き紅葉の色を尋ねる秋が良いかといふ事が、千年以上の歌人の争となつてから、歴代の國文學はおもひ／＼に、其の論争



秋の七草 (筆一抱井酒)

執着心

物のあはれ

に耽つてゐる。源氏物語にも春を愛づる紫の上と、秋を好く
中宮とは、其の代表的人物として描かれてゐる。日本人程自
然美に執着心の深いものはあるまい。

昔の人は物のあはれを知るのを理想とした。これは人情
の美を知ると同時に、自然美を味はふことを言つたものら
しい。人情美を知る位の人には、自然美を味はふことも出来る
し、自然美を理解することの出来る人は、人情美にも缺けぬ
と考へたのである。古武士の理想とした武士道も、之とは離
れないので、いはゆる日本心といふのは、單に武勇一遍を意
味するのでは無い。鎧の袖から刀の鐔まで、風流の數寄を凝
した趣味も、此の見地から理解が出来る。本居宣長の大和心
の歌も、此の意味を加へなければ、了解は出来なと思ふ。

數寄を凝す

自修文

一 文字

文字は言語を記す符牒ふていである。人の思想が遠い處へも後の世にも傳達せ
られるのは、全く此の文字のお蔭である。禽獸には完全な言語も無く、もとよ
り文字も無い。人類の言語があつてから幾千年の後であらう、文明が餘程進
んでから、文字といふものが發明せられた。初は狭い仲間で通用してゐたも
のが、段々と弘く用ひられるやうになつたのであるし、其の文字も時代を逐
うて、次第に變化して來たのである。

繩を結んで拵へた符牒などは別として、物の形を象がいて、其の物の符牒
とするといふことが、誰でも考へつく最初の文字であらう。埃及文字の○D、
漢字の◎Dなどが、全く相似て居るのもそれ故である。かういふ文字を象形

符牒
しるし。

繩を結んで
云々
上古文字のな
い時代には、
繩を結んで記
號とする風が
あつて、これ
の政治を、し
ては結繩の
政といつた。
象形文字の
物の形を象が
いた文字とし

(一) 阿弗利加の北
部にある國の
最も早く文明
の開けた國の
一つである。

(二) Rome.
西暦紀元前七
五三年伊太利
國を建てた。

(三) Greece.
歐洲南部の
國。建國は西
暦紀元前十五
世紀の初葉に
あり、文化の
開化は早く、
たの文化の以
て開けられた
名である。

(四) Russia.
西暦九八八年
露西亞のウラ
ヂミール一世
が國を建てた。

(五) Persia.
露西亞の南東
部にあり、西
暦紀元前六世
紀の初葉にキ
ヤクスの王が
國を建てた。

(六) Phoenicia.
シリアの西部
にあり、西暦
紀元前十二世
紀の初葉に

文字といふ。今日の文明諸國に用ひて居る文字は、皆其の源を象形文字に發して居るので、其の二大源流は、古代文明の榮えた埃及と支那との文字である。

歐米諸國で用ひてゐる羅馬字は、昔羅馬に行はれた文字で、其の數が二十六、これを綴り合せて色々な音をなすことは、諸君のすべて知つて居る通りである。此の外に希臘の國では、今でも昔の希臘字が通用してゐる。

露西亞の文字は三十六字あつて、中には羅馬字と同じのもあるが、元來は昔の希臘字から出たのである。羅馬字も希臘字も、其の源を正せば同じことである。昔のフェニキヤ文字から變化して來たのである。フェニキヤは商業國で、早く之を發達させたのであるが、これは全く埃及の象形文字から進化したものに外ならぬ。フェニキヤ人は埃及の象形文字をば、直ちに音を寫す爲に用ひたのである。音を寫す文字、即ち音標文字を拵へたのである。

東洋では支那が最も早く文明に進んだので、支那の文字を輸入して用ひるやうになつた。日本も朝鮮もさうである。日本も最初は漢字ばかりで日本

から地中海に
連る古名。世
最古の航海通
商國。西暦紀
元前六世紀に
紀元前五世紀
に、年頃から六
世紀頃まで、中
地、海を以て、
貿易の中心地
として、大文化
の發達を遂げ
た。

(一) Assyria.
昔メソポタミ
ヤ地方を中心
として、其の
近に飛鳥の心
國。西暦紀元
前八世紀に、
頃、最も盛な
あつた。

(二) Persia.
露西亞の南東
部にあり、西
暦紀元前六世
紀の初葉にキ
ヤクスの王が
國を建てた。

(三) Greece.
歐洲南部の
國。建國は西
暦紀元前十五
世紀の初葉に
あり、文化の
開化は早く、
たの文化の以
て開けられた
名である。

(四) Russia.
西暦九八八年
露西亞のウラ
ヂミール一世
が國を建てた。

(五) Persia.
露西亞の南東
部にあり、西
暦紀元前六世
紀の初葉にキ
ヤクスの王が
國を建てた。

(六) Phoenicia.
シリアの西部
にあり、西暦
紀元前十二世
紀の初葉に

埃及文字		アフリヤ文字	
古文漢字		梵字	
希臘文字	<i>Χάνα δε διελ χχι χαρόμ για θυγανε.</i>	シテア文字	
羅馬文字	ABCDEFGHIJ KLMNOP abcdefghijklmno	ペルシヤ文字	
諺文		土耳其古文字	

猶太波斯土耳其古の文字など色々ある。それ等は悉く音標文字である。

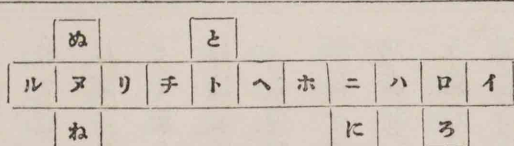
二 新聞社の組織

杉村廣太郎

けて必要に應
 出上つたも
 ので、片假名
 を五十音圖の
 如く排列した
 のは、或は吉
 備、或は伊呂
 波歌、又伊呂
 作、かゝる海
 扁旁、へんや、つく
 り、
 諺文、朝鮮文字。も
 と梵字になら
 ず、つて作つた
 のだといふ。
 楔形文字、
 文字、
 梵字、
 印度文字。サ
 ンスクリット。
 特派員、
 特に派遣され
 る者。
 (Morning
 Post)
 校正、
 印刷したもの
 を原稿と見く
 だすこと。

前年、私が朝日新聞の特派員として倫敦に派遣された時、或日モーニング・
 ポースト社を觀に行つたことがある。ちやうど其の時、モーニング・ポー
 社は新築の出来上つた所で、倫敦の新聞社中で、これが一番新しい建築とい
 ふことになつてゐる時であつた。見て廻る中に、案内に立つてくれた人が、新
 聞社の建築に就いては、私も豫て多少の考案をもつてゐるから聞いてくれ
 ぬか、といふので、新築の見物は、姑く措いて、其の考案を聞くことになつた。其
 の時の話を圖に示すと、ざつと次のやうになる。
 細々しい部屋割は、其の社の模様によつていくらかも附けやうはあらうが、
 大體東の端は記者の入口、西の端は營業部の入口として、ちやうど校正係の
 ゐる所が其の真中に當る事だけは、動かされないものである。
 何故かういふ順に各部室を列べるかといふと、是は東の方から、順々に新
 聞紙の出来て行く手續を逐うて來たのである。まづ東の入口から記者が入

編輯、
 材料を集めて
 新聞を作るこ
 と。
 取捨添削す
 取るべきもの
 は取り、捨つ
 べきものは捨
 て、文章を直
 すこと。
 標題、
 見出し。
 何面、
 何ページと同
 じ意味にも使
 へば、又何の
 部にも用ひる
 意味。
 文選、
 その文に用
 だしの活字を
 より出すこ
 と。
 植字、
 より出した活
 字を文章に組
 立てること。
 紙型、
 組んだ活字か
 ら紙を取つた
 いがた。
 鉛を流し込
 んだ活字を流
 して、紙型に
 用ひる。



イ、記者入口
 (ろ、應接室)
 ロ、原稿製作部(執筆室)
 ハ、紙面整理部(編輯室)
 ニ、(に、電信局、電話交換局)
 ホ、校正部
 ヘ、活版部(文選、植字)
 ト、鑄造部(紙型及び鉛版製
 造)(と、寫真製版部)
 チ、印刷部
 リ、營業部
 ア、營業部
 ル、營業部入口
 (ぬ、廣告部、ね、應接室)

新聞社の組織

つて來る。溜(たま)りに入る。此處で新聞の材料を集める支度をして、外に出て働く者
 は外に出るし、社内(社内)で調べ物をする者は社内(社内)で調べて、新聞記事の材料を集
 める。集つたら、原稿を書く部屋にはいつ
 て原稿を作る。作つた原稿は其の次の編
 輯部へ送られると、編輯部では之を取捨
 添削し、然るべき標題を附けて、校正の方
 へ廻す。校正の方では之を受取つて、行數
 を調べるとか、標題を書換ふとか、何の記
 事は何面に入れ、何の記事は何面に入れ
 るとかを區別して、活版部の方へ廻す。活
 版部では、その原稿に依つて文選植字を
 行つた後、更に校正係に戻す。さうして幾
 度か戻して、幾回か校正を経た上で、愈、文字の間違がないと定まつた所で、鑄
 造部の方に廻す。鑄造部の方では、紙型を流し込むとか、紙型に鉛を流し込むとか、

新聞紙を刷るべき版を作り上げた上で印刷部に廻す。之を印刷部で仕上げた上で發送部に送れば、發送部は營業部の手を経て、それ／＼華客先や大賣捌店へ送り出すことになる。これが即ち新聞紙の出來上つて、世間に持出されて行く日々の順序である。新聞社をかう建築すると、編輯部に用のある者は東の入口から出入し、營業部に用のある者は西の入口から出入し、各部屋とも南北を受けて、光線の具合も、空氣の流通もよい上に、各部室から直ぐ外に出る事も出来るといふのである。

この建築案は、建築案としての可否は別問題として、一には新聞紙製作の順序を説明し、一には此の順序に従つて新聞社の組織を説明してゐる。即ち記者溜(ロ)から編輯部(ニ)までの仕事、所謂新聞記者の仕事で、一般に之を總稱して編輯といつてゐる。それから活版部(ヘ)から印刷部(チ)までが印刷工場の仕事で、發送(リ)に至つて始めて營業部の仕事に移るのである。校正部(ホ)はちやうど真中に挟まつて、工場と編輯との境目をなしてゐる。日本では大抵之を編輯部の附屬としてゐるが、歐羅巴や亞米利加の新聞社では、印刷

蒐集
よせあつめる
こと。
執筆
筆をとつて書
くこと。

Reporter

部に屬する物としてある。新聞社の組織の三大別の中、印刷部と營業部との事はまづおいて、これから編輯即ち新聞紙の製作に關する事柄を説明して見よう。

新聞紙の製作に關する仕事を更に分つて三とする。之を蒐集執筆及び整理といつて、第一は材料の蒐集、第二は原稿の製作、第三は紙面の整理である。材料の蒐集は、地方及び外國から來る電報、又は郵便通信、通信社と稱へて新聞紙の材料供給を本職としてゐるものから届く通信、交換新聞の切扱など色々あるが、其の最も重要なものは、各社の社員が自ら八方に奔走して集めて來る所の記事の材料で、かくの如き任務に従事する記者をリポーターといふ。日本では、昔これを探訪と稱へたが、近頃は之を外勤員と稱へてゐる。次に原稿の製作は、外勤員自ら集めて來た材料を、自ら原稿に作ることもあり、又外勤員は唯材料だけを集めて、之を原稿に綴ることは、編輯部の者に任せ、了ふこともある。新聞記者といふ以上は、自ら材料を集めて、自ら之を文に綴るのが當然であつて、又それが望ましいことでもあるが、日本に限らず何

(一)信濃國北佐久郡。鐵道新輕井澤に對して舊來の宿驛をいふ。
 黃葉疎枝 秋葉あるの葉が黄色くなつて、又は落ちたの枝をいふ。

(二)上野國碓氷郡と信濃國北佐久郡の境上。高三二五尺。

幾十級 風霜に飽く十分風や霜に當つて居る風物

望を凝す 目を凝らす

廣漠 ひろく、とて限りのないさま。

一圓 面。そのあたり一圓。見え隠見え。見えかくれする。

探訪などと稱へてゐたが、今はさういふ區別を立てず、ひつくるめて外勤員と呼ぶことになつてゐる。
 以上解説した所に依つて、新聞社に編輯部、印刷部、營業部の三部あることと、編輯部には材料蒐集、原稿製作及び紙面整理の三課あることとは大略明らかになつた。これが即ち新聞社の組織の大要である。

——最近新聞紙學——

三 碓氷だより

德 富 蘆 花

舊輕井澤より黃葉疎枝の山路二十六町ばかり上れば、即ち碓氷の頂上に候。熊野神社あり。神社を護して十五六軒。神社は街道より幾十級の石段を上りて東南に面し、神殿、拜殿、神樂殿幾年の風霜に飽き、神鈴語らず、鳥歌はず、寂たる社内の風物、いと々神さびてゆかしく候。試に石段の上、傘を杖いて望を凝し候へば、廣漠の景は、双眼の中に歸し候。右手には輕井澤の谷一圓、黃落せる木の枝の間より隠見し、前面には妙義の頭を見越して、甲斐、秩父の連

(三)上野國北甘樂郡。標名、赤城と併せて上州三山といふ。
 撫すべきが 撫するべきが
 如く なる事が出來さうだ。
 如く 如く
 黃色く熱した稲が恰も黄色い河の流るやうに一面に續いて居る。
 (一)上野、下野の二國。昔は上毛野、下毛野といつた。
 迂曲す 遠くまはる。
 杳々 杳々
 はるか。
 白銀の帯 川の白く光つて居る形容。
 望むに隨つて 望むに隨つて
 のぞめばのそむ程ひろく。人生悠々、人間の生涯のいかにもゆつくりしたさま。

山と面々相對し、轉じて左手の方は榛名、赤城の諸峯東北に流れて、手を伸べて背を撫すべきが如く、足下には碓氷一郷の稻田、黃河流るゝが如く、丘陵に従ひ迂曲して、高崎に到つて、茫々たる平野の海に打出し、眼を放てば海よりも廣き二毛、武總の野、杳々天末に連り、黃なるものは田、黒きものは村、粉壁の白く輝ける、川流の白銀の帯を曳ける、心は望むに隨つて、濶く、坐ろに人生悠悠の感を催すもの、これ有り、千載の前曾て此の嶺上に頭を回らして、吾妻の空を眺め、亡き姫を懐かしみ給ひし小碓の尊の昔も、今更に忍ばれ候。
 絶頂より十町ばかりも下り候へば、道の三叉をなせる所に、霧積温泉道、從一里……町と記せし路標の、唯一本淋し氣に薄の中に、み居り申候。概して絶頂より半道あまりの間は、薄と松の世界にて、紅葉は殆どこれ無く候。此の薄の山を過ぎ候折節、淺間の方俄にかき曇り、麓は日影明らかになさしながら、山は一點二點の時雨はらくと帽に落ち申候。
 しぐるゝや薄分け行く山三里
 など打吟じて急ぎ候程に、滿山の時雨薄に落ちて、恰も人の物言ふやうに御

(三)上野碓氷郡。信濃國北佐久郡より野國吾妻郡に跨る。高き八三六尺の活火山。(一)唐の詩人。名は摩詰。また書畫を善くして瀟洒な文人は唐の祖といはれてゐる。(二)唐の詩人。名は應物。風韻の高い自然の詩人として知られてゐる。森然しづかなさま。しんとしたさま。(三)中唐の詩人。字は東野。其の詩句。南山塞天地。日月石上生。高峯夜留景。深谷人自平。山路心亦平。遊蹤遊びあるいた所。(四)高尾、梅尾、榎尾。共に京都

座候。空山聲なく、唯時雨の枯薄に落つる音と、時に木がらしの一陣樹間にわたりて、落葉さら〜と鳴るのみにこれ有り、身はこれ王維畫中の人ならずば、^(一)章蘇州詩中の人にや候はん。一心水の如く澄んで、何となく氣森然と改りたるやうに覺え候は、孟郊の所謂「山中人自正」なるものにも候べき歟。路は落葉多き所に入つて、時雨ます〜音高く相成候。傘を傾け道を急ぎつゝ、獨り空想に耽りて歩み候程に、ふと心づけば、時雨は何時か過ぎて、身は既に紅葉世界に落居り申候。^(四)遊蹤狭き小生の事にて、紅葉といへば、たかゞ京都三尾の秋を見たるばかりの眼は、今一驚を喫し候。何がなし、吾が立つ岨を中心として、碓氷の東面悉く錦に候。左方の山谷を見れば、唯一面の錦。右の山谷を見れば、亦是唯一面の錦。滿山の錦。滿山の焔。五色の焔。峯といはず、谷ともいはず、唯燃えに燃立つ美觀。殆ど壯觀。小生も覺えず嗚呼と叫び申候。其の黄色、淡黄色、褐色、黄褐色、其の他思ふべくして言ふべからず、見るべくして思ふべからざる、ありとあらゆる色美しき錦の地に、遙か彼方の岩の上に、朱の如き黄紅の楓一樹、此方の

郊外の紅葉の勝地。一鷲を喫すおどろく。岨山の側面。深紅まつか。炬火たいまつ。午日まひるの太陽。棲みわぶる家。わびしいすまひの家。(一)唐の詩人白樂天。其の有名な詩の句「林間饒酒焚紅葉」。(二)上野國碓氷郡。碓氷峠の東麓。信越線の鐵道驛。

谷の底に、鮮血の如き淺紅の枝一枝、彼處の松の隣に、夕焼の色よりも濃き深紅の兩三本、宛ら一山を照す炬火の如く、萬段の錦の色を一時によび覺し來るを見たる時には、小生は唯詩才のなきを恨み候。況や淺間時雨は、全山に水洒ぎて去り、深碧の空は明鏡の如く上より照し、今正に碓氷の西南に廻り來りし午日は、億萬條の金光線を惜氣もなく山に谷に漲らし下し候をや。此の峰に山人の棲みわぶる家一つ二つこれ有り、小生其の家の前を過ぎ候時は、主人は何か野稻の収納のやうなる事いたし居候。紅葉が好いね、といへば、は、紅葉かね。と申候。彼等は紅葉に包まれて生活するなれば、何の珍しげもなく、恐らく唯一度の歎美の辭を與ふることなく、白氏の風流を知らず、紅葉を焚きて茶を沸し、朝夕の山の上り下りにも、可惜錦を踏みにじり、かくて年々紅葉を迎へ、紅葉を送るにぞあらんすらん。^(二)横川より一里と申す所に、方餅を賣る茶店これ有り、同所に到れば、碓氷の右側を通る舊道、中央を通る汽車道、左側を通る新道、皆一所に落合ひ、碓氷三里、紅葉の觀は此の處に終り候。

四 植物と氣象との關係

植物の景觀と自然の氣象との間には、おのづからなる關係ありて、互に相
 依り相扶けて、以て此の宇宙の美を現出するなり。故に晴、雨、雷、風、雲、霧、露、月等
 のさま々々の氣象に對する植物の景觀に注意すれば、誠に面白き趣あるも
 のなり。

春の日の霞たなびきたる中に、山櫻の咲亂れたるは、誠に趣深きものにし
 て、其の調和の美しいふべからず。今假に此の櫻花をして澄渡れる秋の空に開
 かしめば、いかなるべきか。恐らくは其の優美艷麗なる特性は、十が一をも現
 すること能はざるべし。また春の野の霞に罩められて、をち方の山々は淡き
 紫色に匂ひ、紫雲英、蒲公英などの一面に咲亂れたる中に、蝶、蜂などの訪れ來
 て、心地よげに飛狂へる光景は、よく花曇の日日和と和して、誠に長閑なる心地
 せらる。

新緑の候となれば、快晴の日にも空氣は水分を含みて、何となく夕立の雲

景觀
 けしき。
 自然の氣象
 天氣や氣候な
 ど。

趣深きもの
 おもしろみの
 多いもの

艷麗
 あてやかに美
 しいこと。
 をち方
 遠方。

花曇の日和
 春の日のどん
 よりした天
 氣。

竹樹
 竹と樹木。
 配合
 とりあはせ。
 坐ろに
 何となく。何
 とはなしに。

清曉
 空のすみわた
 った夜明が
 雪に傲る
 雪にもしほま
 ず平然として
 居るさま。
 いち早く
 願る早く。
 ちばん早く。
 幽情
 おくゆかしい
 心。

起り來べきかと思はるゝものなるが、其の青き空に、綠滴らんばかりなる竹
 樹の枝さし交したるは、其の配合殊に妙にして、人をして坐ろに夏の面白き
 を感せしむ。

やがて晩秋の節となれば、空氣清らかになりて、遠きあたりまで見やらる
 るに、槭樹、公孫樹などの霜に色づきたるが、夕日に映えたる様など、又いひ難
 き趣あり。冬の末より春の初にかけては、寒さ厳しき清曉に、梅、臘梅などの雪
 に傲りて、いち早く咲出でたるは、氣高く心地よきものなり。

雨のおもしろきは、燕子花、花菖蒲などの咲出づる梅雨の頃なるべし。降る
 かとすれば霽れ、霽るゝかと思へばまた降出でて、其の度毎に花の艷麗を増
 すなど、人をして限りなき一種の幽情を催さしむ。殊に此等の植物の花瓣と
 葉とは、おのづから雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は其の上に小さ
 き玉水となりてとゞまれるが、其の美しさ誠に形容し得べくもあらず。

驟雨などの烈しき雨にも、亦おのづからなる植物の配合はあるなり。そは
 多く雨滋き地に生育せる植物、又はさる地より移し植ゑられたる植物にし

梧桐
あをぎり。

餘滴
葉にのこつて
居るしづく。

反射す
光がてりかへ

聯想
或事につれて
思ひだすこ
と。

はかなげ
あぶなげ。
蕭條
極めてものさ
びしいさま。

て、かの梧桐の如きは其の一例なり。其の直立して膚青き幹、其の淺く切れ込
みたる廣き葉の、一は新に洗はれて、一入鮮緑の色を増し、一はばら／＼と音
を立て、其の葉末より餘滴をした、らする光景は、よく此の植物のかゝる
急雨に適せるを見るべし。

蓮の葉もまた雨を受くるに適せるものなり。そは葉の表に一面に天鷲絨
のやうなる細かき突起ありて、其の間に空氣を含むをもて、雨に遭ふとも少
しも濡るゝこと無ければなり。かくて又其の空氣はよく光線を反射するを
以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も殆
どこれに等しき構造をなせり。

秋雨に就きて聯想せらるゝ植物は少からざれど、まづ人の心をひくは芭
蕉なるべきか。秋も末になりて、其の葉の破れ筋の現れて見るからはかなげ
なるに、寂しき雨のうち灑ぎたる、人をして殆ど蕭條の氣に堪へざらしめん
とす。

松は特に雨に適せる植物にはあらねど、其の雨に沾ひて、細き葉の束ねた

しめやか
おちついてし
づかなさま。

魁偉
すぐれて大き
いこと。

豪壯
つよく勢の盛
なさま。

清楚
清くさつぱり
して居るさ
ま。

興なからず
おもしろみの
無いことには
ないある。

風物
景色。

松濤松籟
共に松風をい
ふ。前者は風
の音をなみに
たへたも
の、後者の籟
は風に同じ

るやうになりて、少しうつむきつゝ、雨滴を滴らすさまは、又しめやかなる
趣なきにあらず。

雪は寒國のものなれば、之に適するは寒地の植物なれど、暖地の植物にも
亦これに遭ひて、おもしろき景色を見するものあり。かの常磐木の類例へば
樅、杉、松などの類の濃緑なる葉の、純白なる積雪の下より露れたる、又南天燭
の赤き實の其の間にはの見える、共に色彩の配合上見棄て難き美觀なり。
また松の其の魁偉なる枝もて、竹の其のしなやかなる枝もて、積雪の重みに
堪へたる様は、一は豪壯、一は清楚なる趣ありて、共に賞すべし。

風の趣も亦棄て難し。そよ吹く風の草木を渡りて優しき樂を奏する、木枯
の落葉を吹捲きて凄じき音をたつる、共に興なからずやは、殊に野邊の芒水
邊の蘆の秋風に戦げる趣は、秋の風物の最もあはれ深きものなるべし。又秋
の夕澄渡れる空に、一點の雲も無く、さしたる風の渡ることも見えぬに、樹々の
梢のそよ／＼と打戦ぐは、いひ知らぬあはれの籠るものなり。

松濤、松籟、また一入の趣あるものなり。平地は風吹くとも覺えぬに、松の梢

四 植物と氣象との關係

詩人の吟詠
に上る
詩人の詩中
よみこま
れる。

奇しく。不
思議に。

(一)信濃國西筑摩
郡。木曾川沿
岸の地方。有
名なる森林
地。

凍雲
寒くてこぼつ
て居るやうな
雲。雪もやう
の雲。

幽邃
奥深く物し
づかなさま。

風趣
おもしろいお
もむき。

(二)敷島の大和
心を人とは
ば、朝日に句
ふ山櫻花。
(本居宣長)

中秋の満月
舊曆八月十五
日夜の月。中
秋とは秋三個
月を初、中、晚
に三分した其
の中の一ヶ月
のこと。

(三)疎影橫斜水
清淺。暗香浮
動月黃昏。
(宋、林逋)

臘月夜に香の
どこからとも
なく來る趣を
歌った詩。
適くとして
よからざる
なし
どこへ行つて
もよく適す
る。

景致。風致。
(三)理學博士。東
京帝國大學教
授。岐阜縣の
人。

のひとり美妙なる樂を奏し出づるは、まことに何の音ぞと怪しまる。古來幾
度か詩人の吟詠に上りつらん。

雲は四時を分かすをかききものなり。春の山にたなびきて花かど見紛ふ
白雲、夏の空に奇しく崩れかゝれる雲の峯、秋の野に飛迷ふ薄雲、いづれも皆
どりぐの哀れ籠れり。又冬の日、かの木曾日光あたりの樅、榎、落葉松などの
生ひ茂れる高山を深く立單めたる凍雲は、まことによく幽邃の趣をあらは
すものなり。

霧は高原に多きものなれど、平地、平原にも亦全く無きにあらず。夏の頃、朝
霧の立ちたる時、杉、樅などの常磐木の見え隠れするさま、田、沼、湖水などの一
面に單められたるさま、亦一種の風趣あり。

露は夏、秋に下るものにて、朝風く起出でて、草むらの間を行かば、其の葉ご
とに美しくして、恰も白玉の如くなるを見ん、殊に稻、蘆などのやうなる禾本
科の植物、また欸冬などの葉の縁なる露は、規則正しく置けるを以て、其の觀
頗る美なり。

月は季節によりて其の觀一ならず。春の夜は曇りがちにて、臘月多し。世に
は夜櫻を此の臘月に配して、得難き美景なりといふものもあれど、かの朝日
に匂ふ山櫻の、優美にして壯快なるには比すべくもあらず。夏の月は之に反
して、頗る快活なるものなり。殊に雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、
いひ難き涼味を生せしむ。中秋の満月は空にさえて、其の光誠に常と異なる
は、人のよく知る所なり。

月夜に適せる植物はあまり多からず。かの暗香の浮動を賞すべしといひ
ならはせる梅なども、其の花の美觀は、なほ晝間を以て勝れりとする。されど一
面よりいへば、取りいでてこれといふべき好配合の無きは、たましく以て、適
くとしてよからざるなき月の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、梧桐
の月、皆どりぐのあはれを具へざるはなく、さては秋野の満月、夏山の曉月
など、いづれも他に求め難き景致を具ふるにあらずや。

——三好學植物生態美觀による——

(一)攝津國東成郡。楠木正行、源氏山名時氏の率ゐる足利勢を破つた。時勢は正平二年。霜月十一月の陰曆十一月の朔。淀川にかゝつた橋も、今の大坂邊にあつた。かひなき命、まけて不名譽で、生きながらへてもつまらぬ命。小袖、其の頃のふだんぎ。袖のちひさいものは、いにはる。療養させる。引出物としてあたる。(三)河内國中河内郡。正行戦死の所。(四)八月の河内國藤井寺合戦。十一月の攝津國住吉阿部野の合戦。

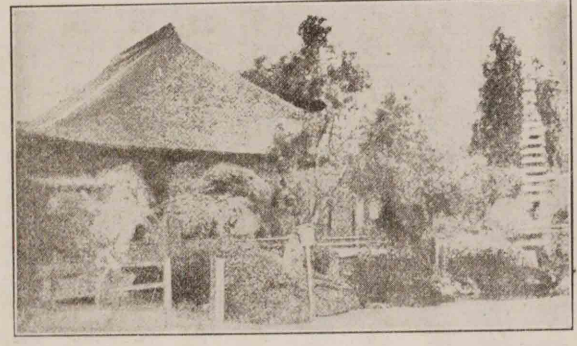
五 如意輪堂

(一)阿部野の合戦は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、薬を與へて疵を療せしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に騎る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながら其の情を感ずる人は、今日より後心を通せんことを思ひ、其の恩を報せんとする人は、やがて彼の手に屬して、後、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢、なごを向けては、敵ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國中、東山

(五)足利勢。(六)足利尊氏。(七)同直義。物、具、弓、矢、甲冑の類。色代、親切に禮儀をつつこと。やがて、そのまゝ。むげに、非常に。ひどく。周章、あわてること。催勢、諸方からかり出して來た兵。雲霞の如く、大軍のむらがつたさま。(一)山城國久世郡。(二)藤原氏。吉野朝の忠臣。男。山に戦死す。庭弱、かよわいこと。よわいこと。宸襟、しんきん。

東海二十餘國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀、八幡に着きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、



(山野吉) 堂輪意如

四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安めまらせ候ひし後、天下ほごなく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、あやふきを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。其の時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴なはで河内へ歸し、死に残り候はんする一族を扶持し、朝敵をほろぼし、君を御代に即け參らせよ、と申し置きて、死にて候然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。此の度われと手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申し、遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき誘に落

命を致す。天子のみ心。死ぬ。扶持す。たすける。手を碎き。出来るだけの手段方法をつかして。一はといふに同じい。次の武略の云々。武略がおとる。有待の身。凡夫のからだ。早世。早く死ぬこと。雌雄。かちまけ。勝負。龍顔。天子の御顔。傳奏。おとりつぎの役人。南殿。紫宸殿。照臨。天子が臣民の上のぞまれること。

つべく覚え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に胃され早世仕る事候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直、師泰に驅けあひ、身命をつくし合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取られ候か、其の二つのうちに戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にていま一度君の龍顔を拜し奉らん爲に、參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心其の氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすくも神妙なり。大敵今勢をつくして向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦手を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。

叡慮。天子の御心。條。こと。

累代。代々。

神妙。もつともほむべきこと。奇特。

安否。云々。安否を決する所なるべし。

股肱。最もたよりとする者。

勅答。勅命にお答すること。

過去帳。死人の名を書きとめておく帳面。こゝは壁板を過去帳としての意。

なき數にい。入るに射るをかけた。

逆修。死なぬ先に死後の冥福をいのること。

(二)教育家。前東京高等師範學

と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、其の奥に、

かへらじとかねて思へば、梓弓なき數にいる名をぞとむむる
と一首の歌を書留め、逆修のためとおぼしくて、各鬘髪を切つて佛殿に投入れ、其の日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。
——太平記——

六 膽力の養成

嘉納治五郎

大丈夫と生れたからには、死生の境に出入して、従容自若として事に當り、天下の大事を談笑の間に決するだけの膽力を有したいものである。膽力のある者は、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ掛ることも、悠然として己を失はぬ。

校長。死生の境に出入す。死ぬか生るか。死の境遇に出入する。從容。ゆつくりおちついて。平氣なさま。談笑の間に決す。わらひ話の間にきめる。己を失はぬ。平氣で本心を失ふやうな事はない。天稟。生まれつき。怯懦。おくびやう。掩護物。おほひかくすもの。

膽力のない者は、天井から鼠の糞が一つ落ちて來ても、膽を冷し、色を失ふ。膽力は天稟に之を有して居るものもあるが、又決して修養し得られぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて門番所の板敷の下に潜伏しながら安眠して居つたとか、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に行つて死人の首を持歸つたとか、ネルソンが幼時から恐怖の何ものたるを知らなかつたとかいふが如きは、皆天稟と見るべきものであるが、修養によつて剛膽の人となつた例も亦決して稀でない。

昔武田信玄の部下に、岩間大藏左衛門といふ武士があつた。其の容貌は魁偉で一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、其の性質は至つて怯懦であつた。信玄がこれを實戦にためして見たところ七たび進んで七たび退いた。信玄はこれではならぬと思つて、或日又戦争の始つた時、大藏左衛門を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて、一步も身動の出來ないやうにした。矢丸は雨のやうに飛んで來る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衛門は恐怖して、殆ど死人のやうになつてしまつた。併ししまひまで、幸に矢丸に中

らなかつた。そこで大藏左衛門は豁然として悟る所あり、運がよければ、雨のやうに下る矢丸でも中らない。死は決して畏るべきものでない。と知り、一變して武勇の士になつたといふ。

之を見ても、あきらめるといふ心の持方の、膽力養成に必要である事がわかる。吾人が危険、災害等の場合に於て、成るべく安全に之を避けようとするのは、自然の人情に相違ないが、しかし、さういふ心の爲に、却つて怯懦に陥る事があるのである。其の最も悪い結果を身に引受けても是非に及ばぬといふ覺悟を極めれば、膽は自然にすわるのである。例へば眞劍勝負をするといふ場合に、敵刃を逃れようと命を惜しんではならない。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切らせて敵の命を奪へ、といふやうに、死身になつて其上に吾が手段と伎倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりは自由かきくから、自然と數倍のはたらきをする事が出来る。強ひて危害を避けようとする、煩悶し、疑懼し、狼狽して、自械自縛するので、十分の伎倆も六七分にしかはたらかず、却つて不結果に陥るのである。

——青年修養訓——

疑懼。うたがひおそれること。自械自縛。自分で自分の手足をしぼること。

七 箱根山

大町 桂 月

(一)天の寶物を藏する爲に箱根の山は作られた。富士山の秀麗なるを天の寶物といふの納むといふた郡。相模國足柄下

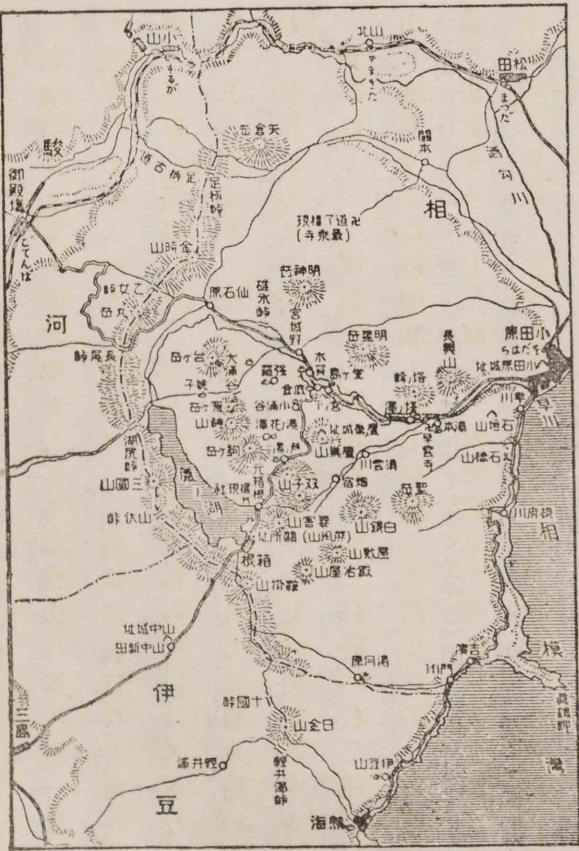
(二)伊豆國田方郡。

簇立す。むらがり立つ。

(一)久方の天つ御寶納むとか箱根の山は作りけらしも 賀茂真淵
温泉場としても遊覽地としても箱根山は海内第一なり。實に日本第一の大遊園なり。都人往々一泊がけにて箱根の入口なる湯本塔の澤に遊び、歸り來りて曰く、箱根に遊びたりと。これ箱根の門には入りたり。されど未だ其の堂に上らざるものなり。況や其の室をや。都人は湯本塔の澤をも箱根と稱すれど、箱根地方にて箱根といへば頂上の箱根町のみをさすなり。
箱根峠といへば、頂上の箱根町より三島町へ行く路の最高處を指す。箱根山と總稱するは範圍頗る廣し。東京より汽車にて小田原に至らば、近く前に箱根山を見るべし。箱根山は群峰簇立す。海岸に近き處に石垣、石橋の二山あり。其の上に連りて聖嶽あり。富士山の形を成して突起す。尙其の奥に鍛冶屋山、屋敷山あり、この一帶の連山より左の方の遠くに淡く見ゆるは天城山脈なり。さて又此の一帶の連山よりは少し近く、且起點が少し右になりて長興

聳立す。そびえたつ。孤峰。唯一つの山。

標高。海面からの高さ。海抜の高。



山塔ヶ峰、明星嶽、明神嶽など順次相連りて聳立す。其の中、明神嶽が最も高くして最も偉大なり。其の明神の右腰に槍の如き孤峰突起す。これ矢倉嶽なり。足柄古道はその矢倉嶽と明神嶽との間を上る箱根古道は聖連山と明神連山との間を上る。その奥に、且其の上の饅頭を二つ並べたるが如き山を見るべし。これ双子山なり。双子の右に稍高き駒の駒の形をなしたるは駒ヶ嶽なり。駒ヶ嶽の右に最も高く尖れるは神山にて、標高千四百三十九米、箱根の最高峰なり。

七 箱根山

七

(一)相模國足柄上郡
 (二)大雄山と稱する。曹洞宗。足柄上郡南足柄村内に曹洞宗の僧了の社あり俗に道了といふ。賽路
 參詣する路。黑白世界。暗い世界や明るい世界あるのていふ。
 (三)駿河國駿東郡富士の裾野の東端。
 (四)足柄上郡。

人もし小田原を経て熱海方面に行くならば、七八里の間は、絶えず箱根山の東麓を通るべし。東麓は直ちに海に接す。石垣山、石橋山、日金山の如きは東麓の小突起なり。又もし汽車にて沼津まで行かば、松田驛までは箱根の北側を仰ぐべし。明神の腰に一帶の松林あるは、道了の賽路なり。隧道多き黑白世界を過ぎて、御殿場あたりに行かば、左の方に箱根の西側を仰ぐべし。其の西側の最北に最も高く尖れるは金時山なり。やゝ低くなりて長尾峠となり。丸嶽となり。數里の間、緩漫なる且偉大なる傾斜をなし、三島に至りて盡く。三島より沼津に行く途にて願れば、箱根の南側を仰ぐべし。右に高きは鞍掛山、左に高きは三國山、箱根古道其の間に通す。この南側の上に、且奥に、神駒、双子の三山を見るべし。曩に松田邊にては、この三山の北面を見たり。今は其の南面を見る。南の鞍掛三國、西の長尾、金時、北の明神明星、これ箱根山の外壁なり。箱根山の特色をいはば、第一に温泉場として設備の整へること。日本第一なり。第二、一山に温泉場の多きこと。天下無類なり。且硫黄泉、酸性泉、鹽類泉、單純泉など、温泉の種類に富む。第三、熱海の大湯、毎日時を定めて涌出す間歇泉

新陳代謝
 代つて來てふるいもの、去ること。
 浴槽
 ゆぶね。
 有數
 すくないこと。まればあること。
 外輪山
 富士火口壁のこと。
 複成火山
 二個以上の火口が重複して成つた火山。
 逆富士
 富士の湖に映る富士の倒影。

として天下稀有なり。第四、伊豆山、湯本、塔の澤、宮の下堂ヶ島、底倉などの温泉は、清く澄みて涌出量多く、絶えず新陳代謝して、浴するに氣持のよきことなり。殊に伊豆山の千人風呂は、浴槽の偉大なること、天下第一なり。第五、金時山、明神嶽、明星嶽、淺間山、鷹巢山、要害山、鞍掛山、箱根峠、山伏峠、三國山、湖尻峠を、外輪山とせる箱根の噴火口は、東西一里半、南北三里に亘りて、其の偉大なること、世界有數なり。第六、箱根は複成火山にて、外輪山の中に神山、駒ヶ嶽、二子の三山更に噴出したるものなるが、此等の山に上れば眺望壯大、種々の高山植物あり、殊に箱根特有の箱根米、躑躅さへあることなり。第七、山上に蘆の湖と稱する、山湖ありて、逆富士の奇觀あることなり。第八、大地獄に噴火の餘勢を見ることなり。第九、音に聞えし箱根の關所の址もあり、山中城、鷹巢城、小田原城、豊太閣の陣したる石垣山、頼朝の戦ひし石橋山など、故蹟多く、社は三島神社、箱根神社、伊豆山神社、寺は道了權現、後北條五代の墓ある早雲寺など有名なり。日本武尊の「吾妻はや」と歎き給ひし碓氷峠は、中山道の碓氷峠にあらずして、箱根山中、即ち宮城野村と仙石原村との間にある碓氷峠なりとの説さ

へありて、歴史に富めることなり。第十箱根町、元箱根、蘆の湯など、上へのぼれば上る程夏涼くして避暑に適す。第十一、東麓の小田原、早川、真鶴、吉濱など海水浴をなすに適す。殊に熱海、伊豆山は温泉場にして海水浴を兼ねたり。第十二紅葉の美観あることなり。第十三、山青く水清くして、少しも塵埃の起らざること、温泉場として比類稀なり。第十四箱根の諸山は富士を仰ぎ、駿相二海に俯す。神山然り、日金山然り、鞍掛山、駒ヶ嶽、二子山は猶其の上に蘆の湖を望む。乙女峠は富士を望むに最も佳なり。乙女峠の富士とて世に有名なり。第十五、東京より僅々二時間半にて入口の湯本温泉に達すべく、湯本より強羅までは登山電車の便あり。更に自動車にて頂上の蘆の湖にも達すべし。天下廣しといへども、自動車にて頂上まで上れる山は唯箱根山のみなり。

(一)大正二年東京
至誠堂發行。

箱根を日本第一の大遊園といふとも、誰か否まん。

—箱根山—

三訂帝國讀本卷六終

通用字及び正字對照表

(按に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

劔	剪	乃	函	滅	涼	準	况	決	冒	免	免	佞	佞	兩	通用正	
劍	翦	刃	函	滅	涼	準	況	決	冒	免	免	佞	佞	兩	通用正	
冤	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	廢	廚	卿	鄉	即	効	通用正	
冤	牆	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	廢	廚	卿	鄉	即	効	通用正	
拔	拿	戲	懣	懣	慨	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正	
拔	拏	戲	懣	懣	慨	恆	往	廩	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正	
濱	溫	水	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	擗	擗	擗	插	通用正	
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	擗	擗	擗	插	通用正	
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潛	濶	通用正	
杯	鼓	癡	略	畧	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	鎔	陰	潛	闊	通用正	
纘	纘	紀	穀	粘	籤	纂	節	竝	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正	
纘	纘	紀	穀	粘	籤	纂	節	竝	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正	
厠	勅	冲	恸	俟	京	亡	並	萬	聒	耻	羹	群	罰	纏	通用正	
厠	敕	沖	恸	埃	京	亾	並	萬	聒	恥	羹	羣	罰	纏	通用正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	嚙	叶	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	通用正
婚	姉	妍	妊	野	坂	嚙	叶	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	同	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用正
考	慙	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	同	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用正
概	槁	楫	棕	棊	案	柿	村	普	同	贗	贊	賓	象	讎	識	通用正
槩	槁	楫	棕	棊	案	柿	村	普	同	贗	贊	賓	象	讎	識	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	同	隸	隙	間	鎖	隣	輒	通用正
砧	睹	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	同	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	通用正
緜	總	網	紆	糾	粽	筍	競	稿	同					鬱	鬪	通用正
縹	總	網	紆	糾	糗	筍	競	藁	同					鬱	鬪	通用正

附錄

羈 羈 羈
 船 船 船
 花 華 花
 荒 荒 荒
 武 武 武
 蹤 蹤 蹤
 鏤 鏤 鏤
 鏽 鏽 鏽
 駟 駟 駟
 驅 驅 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ畧字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

巨 互 體 體 但 但 僭 僭 胃 胃

恒ニ同ジ。ワタル。「連互」
 策ニ同ジ。アラシ、鹿、粗。カラダ。
 タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 ミダリガハシ、猥。
 身。越エテオゴル。「僭越」
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」

協 協 刺 刺 臺 臺 后 后 商 商 壺 壺 姫 姫

カナフ、叶。オビヤカス、脅。サス。「刺殺」。客。名刺。モトル、ソムク、乖。「亞刺比亞」
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽 台臨」
 ウチナ、ダイ。
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 アキナヒ。
 モト、本。
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 ツ、シム。
 ヒメ。

託 託 担 担 改 改 槍 槍 欠 欠 糸 糸 羨 羨

拓ニ同ジ。オス、ヒラク。ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツゲ。
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。アラタム。
 ヤリ。
 鏘ニ同ジ。鏘ノ聲ノ形容。アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 ホソイト、細絲。
 イト。
 支那ノ地名。ウラヤム。

虫 虫 詔 詔 証 証 豊 豊 迄 迄 撰 撰

魚介類ノ總稱。又マムシ。ムシ。
 ワビ、ワブ。「詔狀」
 詔ニ同ジ。アザムク。
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 禮ノ古字。エダカ。
 マデ。
 ユク、行。
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

卻シラソク、退卻
ロマ、障。

鍛キタフ、鍛錬
シコロ「鍛」

宛字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
かひ(卒の意
の場合) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、遺
しまふ 仕舞ふ
せつかく 折角
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡

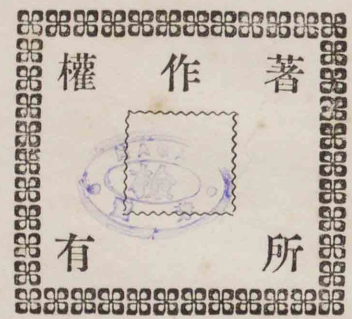
附録終

でたらめ 出鱈目
とうく 到頭
とかく 兎角、左右
とて、とても 迎
とにかく 兎に角
なかく 中々、却々
ふるまひ 振舞
はかなし 果敢なし
ほんたう 本當
むだ 無駄
むづかし 六ケし
やたら 矢鱈
やはり 矢張

大正十三年十月三日 訂版發行
大正十三年十月十日 訂版發行
大正十三年十一月二日 訂版發行
大正十三年十一月十四日 訂版發行
大正十三年十一月二十五日 訂版發行
大正十三年十二月八日 訂版發行
大正十三年十二月十四日 訂版發行
大正十三年十二月二十五日 訂版發行

(三訂帝國讀本)

價	定
卷一、二、三、四、各金四十五錢	大度
卷五、六、各金四十七錢	正時
卷七、八、各金三十七錢	十時
卷九、十、各金三十六錢	三時
卷一、二、三、各金八十一錢	大度
卷五、六、各金七十二錢	正時
卷七、八、各金六十七錢	十時
卷九、十、各金六十五錢	三時



著者 芳賀 矢一
發行兼合資者 富山房
代表者 坂本 嘉治馬
印刷者 合資會社 富山房
合資會社富山房社長
東京市神田區通神保町九番地
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

發行所

東京市神田區通神保町九番地 合資會社 富山房
長電話神田三〇一四・三七六〇番
振替口座東京五〇一番

庫

23

193

広島大学図書

2000073193

